

## 比恵 79

——比恵遺跡群第 139 次調査の報告——



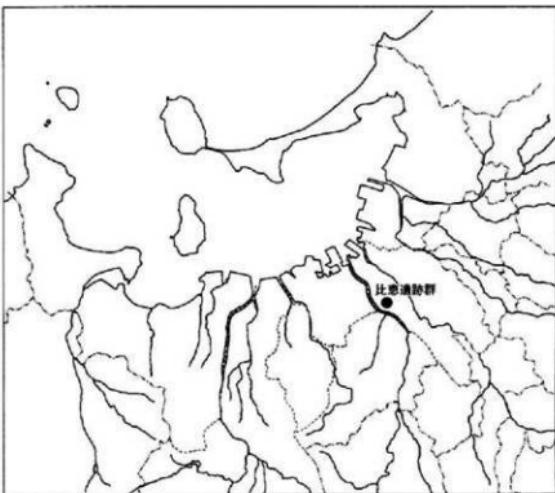
2018

福岡市教育委員会



# 比恵 79

——比恵遺跡群第 139 次調査の報告——



遺跡略号 HIE-139

調査番号 1516

2018

福岡市教育委員会





1. 比恵 139 次 I 区南西側遺構群調査状況（北東から）



2. 比恵 139 次 I 区西側～北西側調査状況（東から）

## 巻頭図版 2



3. I 区北西側～北側遺構群調査状況（南東から）



4. II 区（・I 区南西側）調査状況全景（北西から）



6. II A区遺構検出状況（南西から）



7. II B区・II A区東半遺構検出状況（北西から）



8. II D区遺構検出状況（北西から）



9. II C区・II D区西半遺構検出状況（南西から）



11. II A・II B区下部遺構検出状況（東から）



10. II区主要部遺構掘削状況全景（1回目）（北西から）

## 巻頭図版 4



12. I区 SC005 東西ベルト土層状況（北西から）



13. I区 SX011-002 最下層  
砂礫検出状況（北東から）



14. I区 SE025 半裁土層状況（北西から）



15. SX077 半裁土層（北から）

16. SX061 半裁土層（北から）



19. I区 SD064 北側土層（南から）



17. SX048 半裁土層（東から）



18. SX050 半裁土層（北から）



20. I区 SP024 柱穴土層・底面土器出土状況（東から）



21. I区 北壁土層 4（南東から）



22. SP2064 出土ガラス小玉写真

23. SP1167 出土石製  
鋤型（？）破片写真

## 序

福岡市は、古くから中国大陸や朝鮮半島など東アジアとの文化交流の門戸として、また対外交易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。このような歴史的環境のもとに、市内には数多くの遺跡が残されており、本市におきましては保護と活用に努めているところであります。しかしながら、都市の発展に伴う開発行為によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財については、事前に発掘調査を行って、記録保存を行っています。

本書は、博多区博多駅南四丁目地内における社屋兼共同住宅ビル建設工事に先立ち実施した、比恵遺跡群第139次発掘調査について報告するものです。この調査では、弥生時代、古墳時代、飛鳥時代の集落跡を検出し、同時期の土器や鉄器、石器などが出土しました。集落跡は、堅穴住居や掘立柱建物が何度も建て替えられた痕跡が確認されており、特に弥生時代中期から古墳時代前期には集落の中核部の一部であったと考えられます。また時期により住居跡や建物跡の方位が変化していることも分かりました。これらの調査成果は、当遺跡が地域の歴史において重要なものであることを示す貴重な資料となっています。

本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究資料として、また地域の歴史の学習の材料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、事業者様をはじめとする関係者の方々には、発掘調査から資料整理、報告書作成にいたるまで、ご理解と多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げる次第であります。

平成30年3月26日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

## 例　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、平成27年7月15日から同年10月30日まで発掘調査を実施した、共同住宅建設工事に伴う、比恵遺跡群139次調査の報告書である。
2. 発掘調査は、建設工事によって遺構が影響を受ける範囲について行っている。
3. 遺構の呼称は記号化し、溝状遺構をSD、堅穴建物（堅穴住居）をSC、掘立柱建物をSB、土坑をSK、柱穴などビット状遺構をSP、その他の遺構（土坑状大型柱穴、不明遺構、特殊遺構、近代以降の擾乱）をSXとした。
4. 本書の遺構図に用いる方位北は、特に断りがないものは磁北である。磁北は真北から西偏約 $6^{\circ} 20'$ である（国土座標北からは西偏約 $6^{\circ} 40'$ ）。ただし図面によっては真北を求めている。調査地付近の国土座標点（世界測地系）は、国土交通省が各所に設置している都市再生街区基準点から座標位置を求めていている。また調査区内の標高は、埋蔵文化財課が比恵遺跡群内に設置している基準点のうち「T27」の標高（6.127m）から移動して用いている。これについては北側の比恵100次調査の標高基準と同じである。なおこの標高基準は、比恵遺跡群内にある春住小学校に設置された水準点から移動したレベルより僅かに高く、上記の都市再生街区基準点から移動したレベルより僅かに低いので注意が必要である。
5. 本書に用いる遺構図の作成は、調査担当の久住猛雄（当時、福岡市経済観光文化局埋蔵文化財課）および、山崎龍雄、松崎友理（当時、埋蔵文化財調査課）、藤野雅喜、坂口剛毅、上方弘尚（当時、埋蔵文化財調査課技能員）が行った。遺物の実測は、土器・陶磁器類は主に平田春美（埋蔵文化財課技能員）が行い、一部を山本麻里子、光吉千里（埋蔵文化財課技能員）、久住が行い、製図時に久住が各図をチェックし一部修正した。鉄器は立石真二（埋蔵文化財課技能員）が実測した。石器の実測は、石製鉗型を除き山口謙治（文化財保護課嘱託）が行った。製図は、久住のほか、神啓崇（埋蔵文化財課）、小畠貴子、松下伊都子、鳥井幸代（整理補助員）、山本、光吉、立石が行つた。石製鉗型は、神が実測・製図を行い、久住が一部加筆修正した。玉類の実測は谷澤重里（九州大学教員）が行つた。また本書に用いる遺構写真および遺物写真是、玉類のみを谷澤が撮影したが、他は全て久住が撮影した。
6. 鉄器の精り取りおよび保存処理は比佐陽一郎、松園奈穂（埋蔵文化財センター）が行つた。またガラス玉の蛍光X線分析による成分分析は、埋蔵文化財センターの機器を用いて谷澤が行つてゐる。
7. 本書の執筆は、石器については山口謙治が、玉類については谷澤重里が行つたが、その他の執筆と編集は久住が行つた。
8. 本調査に関わる出土遺物と記録類（図面、写真等）は、全て埋蔵文化財センターに収蔵され、管理される予定である。

## 本　文　目　次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
3. 比恵・那珂遺跡群に関する地理的歴史的環境と調査研究略史	2
II. 調査の記録	9
1. 調査の概要	9
2. 検出遺構	11
(1) 堅穴住居・堅穴遺構 (SC)	11
(2) 井戸 (SE)	30
(3) 土坑 (SK・SX)	30
(4) 溝状遺構 (SD)	35
(5) 掘立柱建物 (SB)、柵列区画 (SA)	41
3. 出土遺物	43
(1) 土器・陶磁器	43
(2) 石器・石製品	43
(3) 鉄製品	44
(4) 玉類	44
図版 (PL.)	45

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区博多駅南四丁目 42 番 1, 46 番 1 地内における社屋兼共同住宅ビル建設工事の開発事前協議申請に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成 27 年 3 月 17 日付で受理した（事前審査番号 26-2-1096）。これを受け経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課（当時）事前審査係は、照会地が周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群（分布地図番号 37-0127）に含まれ、かつ北側隣接地で発掘調査がなされていたため、埋蔵文化財が存在する可能性が高いものと判断した。その後協議を経て、平成 27 年 6 月 8 日に既存建物の基礎解体工事の立会および確認調査を実施した（試掘番号 27-64）。その結果、弥生時代などの遺構と遺物が確認され、予定される建設工事は地下の埋蔵文化財に影響を与えると判断され、埋蔵文化財の保全等に関する事業者等と協議を行った。

その結果、確認調査の結果と建設工事の計画を照合し、埋蔵文化財への工事の影響が避けられない範囲について記録保存のための発掘調査を実施することで、事業者と合意した。また建設工事範囲東側の一部については、確認調査の結果から、遺構の遺存が無いものと判断し、発掘調査範囲としないこととなった。以上の協議により、平成 27 年 7 月 6 日付で土地所有者であり工事事業者である有澤建設株式会社を委託者とし、福岡市長を受託者とする埋蔵文化財発掘調査業務に関する委託契約を締結し、同年 7 月 15 日から 10 月 30 日の期間で発掘調査を実施することになった。

発掘調査は平成 27 年 7 月 15 日に開始し、同年 10 月 30 日に終了した。調査では、調査対象地の西側から中央部の一部では、想定していた遺構密度よりも濃密な遺構分布がみられる部分もあったが、対象地北側および東側の大半は、確認調査による想定どおりに一段低く削平され、遺構の遺存が顕著に少なくなっており、全体としては予定調査期間内に発掘調査を終了することができた。

なお、資料整理および報告書作成は、当初は平成 28 年度に行う予定であったが、協議の上、これを平成 29 年度に行うことにして変更し、平成 30 年 3 月に報告書を刊行することになった。

また、当該調査に関する基本情報は下表のとおりである。

### 2. 調査の組織

調査主体： 福岡市教育委員会

（発掘調査 平成 27 年度：資料整理・報告書作成 平成 29 年度）

発掘調査および整理・報告総括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課（平成 27 年度）・埋蔵文化財課（平成 29 年度）課長 常松幹雄

埋蔵文化財調査課調査第 2 係長 榎本義嗣（平成 27 年度）

埋蔵文化財課調査第 2 係長 大塚紀宣（平成 29 年度）

事前審査：埋蔵文化財審査課事前審査係 文化財主事 板倉有大（平成 27 年度）

発掘調査および整理・報告庶務：埋蔵文化財審査課管理係 横田 忍（平成 27 年度）

文化財保護課管理調整係 松原加奈枝（平成 29 年度）

発掘調査および整理・報告担当：埋蔵文化財調査課調査第 2 係（平成 27 年度）・埋蔵文化財課調査第 2 係（平成 29 年度） 文化財主事 久住猛雄

### ＜調査基本情報＞

遺跡名	比恵遺跡群	調査次数	139次	調査略号	HIE-139
調査番号	1516	分布地図図幅名	037 東光寺	遺跡登録番号	020127
申請地面積	999.05m <sup>2</sup>	調査対象面積	500m <sup>2</sup>	調査面積	489.12m <sup>2</sup>
調査期間	平成27(2015)年7月15日～10月30日			事前審査番号	26-2-1096
調査地地番	福岡市博多区博多駅南四丁目42番1, 46番1				

### 3. 比恵・那珂遺跡群に関する地理的歴史的環境と調査研究略史

比恵遺跡群は福岡平野中央の那珂川と御笠川・諸岡川に挟まれた洪積台地（段丘）上に立地しているが、以下述べるように南側に接して連続する那珂遺跡群とは一連の遺跡群と言える（以下、山王遺跡も含めて「比恵・那珂」と総称する）。比恵・那珂は東西を上記河川に挟まれた標高5~11mの中位段丘上に立地している（Fig. 1）。段丘中央にある東西の浅い鞍部を境として、北側が比恵遺跡群（以下「比恵」）、南側が那珂遺跡群（以下「那珂」）であるが、弥生時代後半期～古墳時代前期と古墳時代後期～飛鳥時代においては、遺構分布上の明確な分離はできず、両者を「比恵・那珂遺跡群」と総称されている（田崎博之 1998、久住猛雄 2008）。その範囲は、南北2.5km、東西は最大1.0km前後におよぶ。さらに南の五十川遺跡北部や東の山王遺跡も段丘地形と遺構分布が連続しており、行政上の「周知の埋蔵文化財包蔵地」の区分を越えて同一の遺跡群としてもよい。なお、福岡平野における弥生時代のもう一つの巨大集落である春日丘陵の須玖岡本遺跡群（春日市）とは約3kmの距離である（Fig. 1）。

比恵139次調査地点は比恵中央北東部に位置する（Fig. 1・2）。周囲標高は、6.2~6.6mである。敷地北側は比恵100次調査地点であり（福岡市埋蔵文化財調査報告書第956集；以下、「福岡市報」「○集」とする）、また道路を挟んだ南側は戦前の区画整理に伴う「比恵1次」調査がなされ、「1~3号環溝」が発見された土地である（鏡山猛 1956~1959）（Fig. 3・4）。比恵・那珂は、すでに大正年間に中山平次郎が付近の踏査を行い（中山平次郎 1917）、福岡地方で広域かつ多数の遺跡の踏査や遺物の表面採集を行った中山を以ってして、「竹下以北比恵南方」の地域が「他にこれ程の広き遺跡を見出し得ぬ」として、「最古の那津の都市」であろうと予測していることが注目される（中山平次郎 1925）。その後、1933年に始まる比恵付近の博多駅南地区土地区画整理による造成工事に際し、1938~39年に鏡山猛と森貞次郎が「環溝」で有名な比恵の1次調査を行った（Fig. 3・4、註1）。鏡山はこれを縦轍として各地の環溝集落を集成し、分析したが（鏡山 1956~1959）、その調査・研究は弥生時代集落論史上、全国的にも非常に重要である（武末純一 1990）。1952年には森貞次郎が発掘調査を行い、「比恵環溝住居址」を検出した（比恵2次）。この地点は現在、福岡県指定史跡になっている（註2）。以後、比恵では1966年から開発工事に対応した緊急調査が行われ、1981年以降は福岡市教育委員会が発掘調査を行い、2017年度末現在151次の調査を数える。また那珂は、1948年に那珂八幡古墳の埴丘裾で銅戈鉄型が採集されて注目され、1971年に鉄型出土地において森貞次郎が最初の発掘調査を行った（那珂八幡古墳調査団 1978）。以後、那珂では1972年から緊急調査が行われ、1977年以降は福岡市教育委員会が発掘調査を行い、2017年度末現在172次を数える。さらに山王遺跡（以下、「山王」とする）は、当初はかつて甕棺の分布が確認され「比恵甕棺遺跡」とされていたが、2次調査以降は各時代にわたることから「山王遺跡」とされ、2017年度末現在13次の調査を行っている。様相的には比恵の東地区として捉えられる。

さて比恵遺跡群は、現在の標高は5~8m前後の比較的平坦な市街地を形成しているが、これは戦前の大規模な区画整理事業や、都市開発の結果である。本来は小規模な開折谷が複雑に入り込んだハツ手状の景観であり、起伏がある段丘地形であった。遺跡群の立地する段丘は、花崗岩の風化礫層を基盤とし、その上部に粗砂、細砂、黒褐色～暗褐色シルト（腐植土壌）、阿蘇山の約9万年前の大噴火（Aso4）による火碎流起源の青灰色砂質シルト層・八女粘土・鳥栖ロームが堆積し、その上に動植物や人間活動痕跡をふくむ表土層が形成される。比恵では多くの場合、表土層を除去した鳥栖ローム上面、または削平が顕著な場合には八女粘土上面で遺構が検出される。ただし、微地形上の鞍部（谷部）では二次的に堆積した黒褐色シルト質土層上面で遺構が検出される場合や、遺構密度が濃密過ぎて「真っ黒な包含層」状になっている場合もあり、調査の際には注意を要する。今回報告する比恵139次や、あるいはたとえば那珂115次・125次などでは、表土直下の「真っ黒な包含層状」上面で遺構を検出

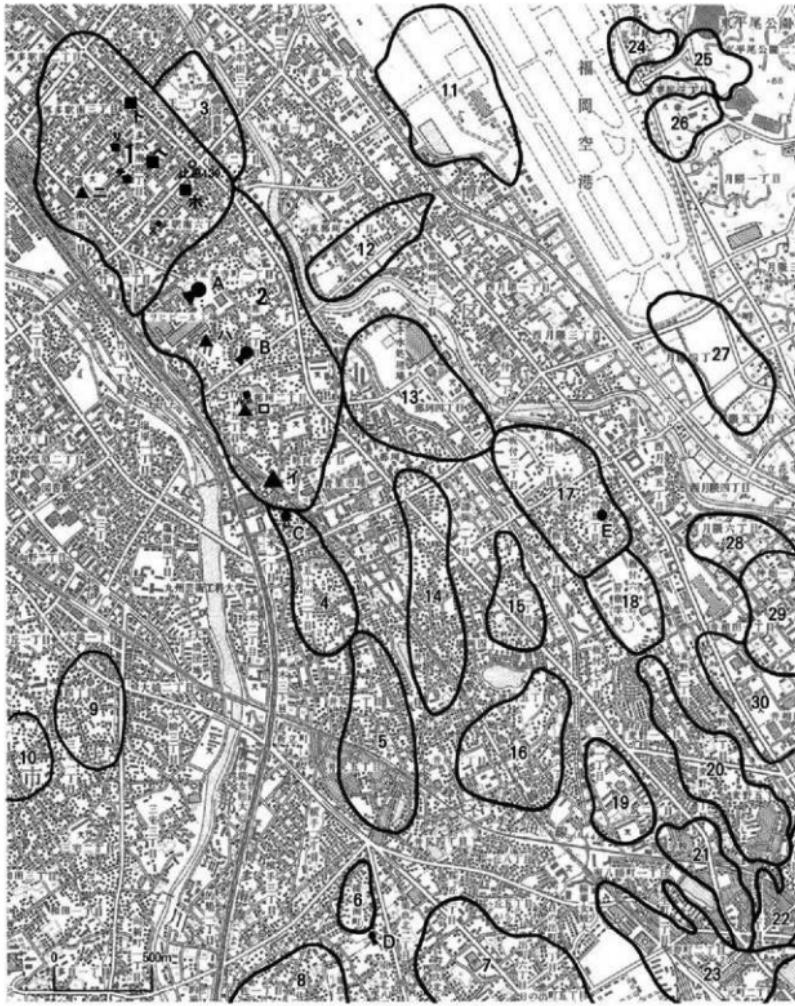


Fig. 1 比恵・那珂遺跡群と周辺の遺跡 (1/25,000)

1. 比恵遺跡群、2. 那珂遺跡群、3. 山王遺跡、4. 五十川遺跡、5. 井尻B遺跡、6. 寺島遺跡、7. 須玖岡本遺跡群、8. 曰佐遺跡、9. 大橋E遺跡、10. 三宅A遺跡・三宅寺跡、11. 雀居遺跡、12. 東那珂遺跡、13. 那珂君体 (那珂深ワサ, 那珂久平) 遺跡、14. 諸岡A遺跡、15. 諸岡B遺跡、16. 笹原遺跡、17. 板付遺跡、18. 高畠遺跡、19. 三筑遺跡、20. 麦野A遺跡、21. 麦野B遺跡、22. 麦野C遺跡、23. 南八幡遺跡、24. 久保園遺跡、25. 席田大谷 (・赤堀ノ浦) 遺跡、26. 宝満尾遺跡 (24~26. 席田遺跡群)、27. 下月隈C遺跡、28. 井相田D遺跡、29. 仲島遺跡、30. 井相田C遺跡、A. 東光寺劍冢古墳 (古墳後期中頃, TK10~6世紀中頃)、B. 那珂八幡古墳 (古墳早期～前期初頭)、C. 今宮神社古墳 (古墳前期?)、D. 須玖御陵古墳 (古墳前期初頭)、E. 板付八幡古墳 (古墳後期後半, MT85~TK43 = 6世紀後半)、イ. 那珂37~117次ほか (弥生時代早期環濠、飛鳥時代中～後期 = 7世紀中頃～第3四半期長舍建物方形区画)、ロ. 那珂23~114次 (飛鳥初期～中期方形区画濠=初期官衙遺構, 初期瓦)、ハ. 那珂115次 (古墳後期末～飛鳥建物群=初期官衙遺構, 初期瓦建物)、ニ. 比恵8~72次 (「那津官家」比定地, 古墳後期後半～飛鳥中期大型倉庫群, 三本柱壇区画)、ヲ. 比恵1~3号 (「環濠」群, ヒ. 比恵1~6・16次ほか (弥生中期堆丘墓, 古墳早期～前期初頭比恵1号墳), 県史跡 (環濠住居跡))、ヒ. 比恵131次 (弥生中期～後期の長大な井堰群)、ヲ. 比恵143次 (古墳前期初頭石硓出土地点)、リ. 比恵91次 (弥生終末～古墳初頭土器窯, 「市」閑連遺構)、ヌ. 比恵36~55次 (古墳早期前方後方墳)、ル. 那珂114次 (号墳 (古墳前期初頭前方後方墳))

奈良園における遺跡 (埋蔵文化財包蔵地) 約図はおよその範囲を示したものであり、全ての「周囲の埋蔵文化財包蔵地」を網羅しておらず、事前審査窓口の分布図とともにや異なるものがある。また調査の進展により遺跡範囲は変動する場合もあり、注意されたい。

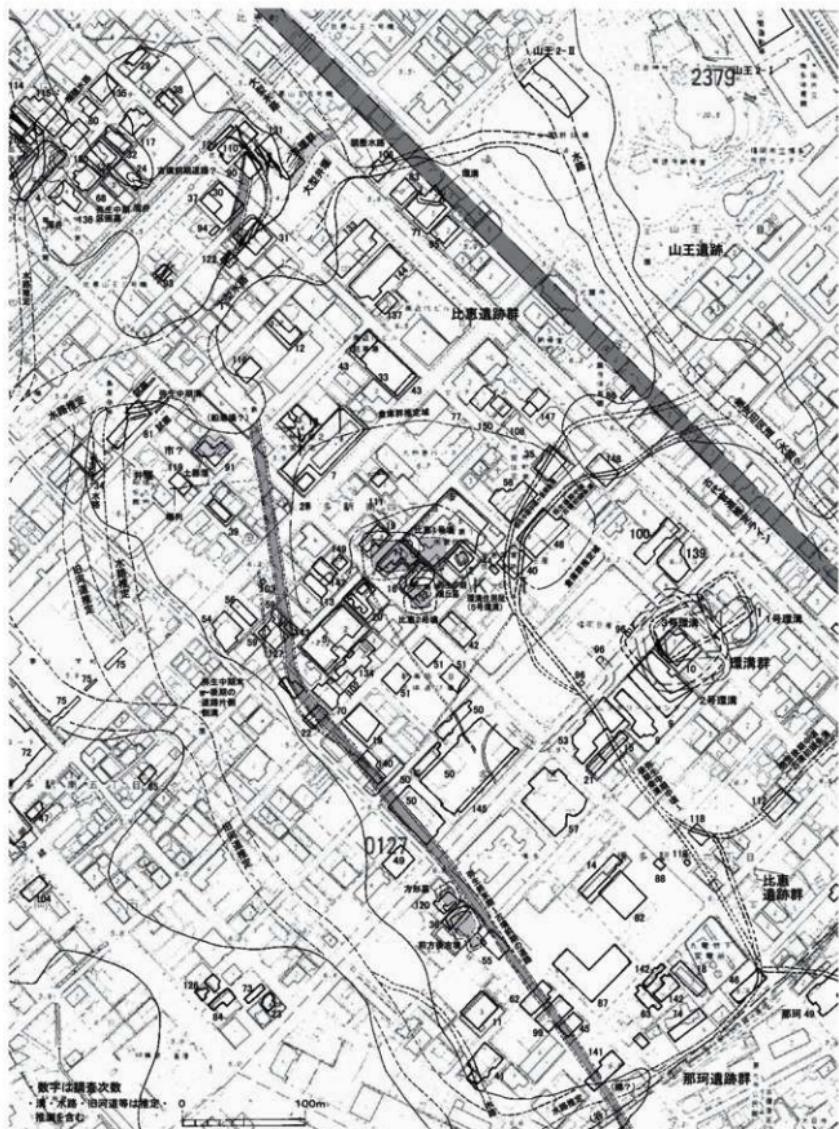


Fig. 2 比恵遺跡群主要部と139次調査地点の位置 (1/4,000) ※1～3号理溝位置は修正

したことにより（比恵139次の例として卷頭図版3-6～9）、すでに後世の削平により浅くしか遺存していない堅穴建物やその痕跡、平地建物に復元できる掘立柱建物を多く検出することができたが、これを

調査時の最初に鳥栖ローム地山が多く見える面まで不用意に下げてしまうと、多くの遺構を失ってしまう。これは比恵の南に接する那珂や、東に接する山王でも同様である。

比恵遺跡群では、弥生時代早期（「突撃文土器」期）以降、飛鳥・奈良時代に至る時期の集落および墳墓遺構が主に調査されている。特に、弥生時代中期後半（須玖II式）から古墳時代前期前半（紀元前1世紀～紀元後4世紀初頭頃）、飛鳥時代初頭～中頃（6世紀末～7世紀第3四半期頃）に遺構分布と遺構密度のピークがあるが、これらの時期の遺構分布範囲は100haを超える。前者の弥生時代から古墳時代前期の遺跡としては、日本列島内で最大級である。弥生時代早期以降の遺物・遺構は継続的で、弥生前期初頭（板付I式）以降は遺構・遺物ともに増加する。弥生前期は、遺跡の北西部を中心とした段丘縁辺部数箇所に貯蔵穴や水溜土坑（溜井）、溝（小水路）などの遺構の分布がみられる。同じ頃、那珂南端には早期後半成立の二重環濠集落が存在する。前期後半以降に堅穴住居、貯蔵穴、土坑墓・甕棺墓地などの遺構の分布が各所に広がるが、中期前半（須玖I式）以降に段丘中央部の標高「高位面」（田崎博之 1998）に甕棺墓地や堅穴住居、土坑などの遺構が進出するのが画期である。中期後半（須玖II式）以降には段丘中央部を中心に遺構分布が濃密となり、「集住」して広大な集落を形成する。段丘中央への居住域進出とともに中期中頃（須玖I式後半）には八女粘土層まで達する井戸の掘削が開始されるが、近年の調査では山王遺跡の段丘上において中期前葉（須玖I式前半）から井戸の掘削があったことが明らかになった（山王10次、福岡市報1309集）。段丘中央の居住遺構が濃密化する中期後半には、八女粘土層以下までも深く掘削する井戸も出現し、井戸の造営数は北部九州の同時期の遺跡では突出して最大多数であり、その状況は古墳前期前半まで継続する（久住愛子・久住猛雄2008）。人口の集中を示す。中期後半以降は、高床倉庫や平地建物を含む掘立柱建物も多くなり、比恵遺跡群の中心部、段丘中央には径10m以上の超大型堅穴住居も出現する。さらに中期中頃から「条溝」や「大溝」の掘削が開始され、後期にかけて直線的な大溝・条溝や方形を指向する「環溝」が段丘上を区画し、通常の集落の構造とは一線を画する。弥生中期の墓地は複数箇所で確認できるが、比恵6次の墓群は墳丘墓を形成し（吉留秀敏1989）、中期中頃の甕棺からは細形銅劍が出土した。後期になると墓地遺構は不明確となるが、井戸、堅穴住居、掘立柱建物、溝などの遺構は間断なく営まれる。後期初頭以降の井戸数の増加を考慮するとむしろ集落の人口密度は増大したと考えられる。比恵・那珂遺跡群における井戸址の集中は特異であり、水場に乏しい段丘上における極度の「集住」がその築造の背景にあろう。後期初頭以降には比恵中央東部に「1号環溝」が造営され、以後、「3号環溝」「2号環溝」と続く。さらには片側ないし両側に側溝を備える「道路」的な帶状空間が少なくとも中期末には出現し、条溝、環溝とともに広大な集落内を機能的あるいは階層的に区画することが開始され、以後「街区」化して「都市」の様相を呈していく。弥生時代の比恵・那珂は、銅鏡副葬等の厚葬墓や青銅器埋納遺構が現状見られず、その状況は存在する福岡平野のもう一つの弥生時代巨大遺跡群である須玖岡本遺跡群（春日市）と比較して、政治・祭祀的センター性に乏しい（久住猛雄2000）。しかし、高床倉庫域と考えられる広域の掘立柱建物卓越地区の存在や（Fig.2 の「倉庫群推定域」）、朝鮮半島系（粘土帯土器、三韓土器、楽浪土器）や列島内各地の広範囲の外来系搬入土器の継続的存在などから、交易（経済）の一大拠点としての性格が考えられる（久住2008、森本幹彦ほか2015）。長距離交易の一大拠点であったことは、水銀朱原料である辰砂（中国大陆原産）の一括出土（57次、69次）や、中国戰国末期の「燕」ないし衛満朝鮮に由来する鑄造鉄斧の出土（51次）、長方形または板状小型鉄素材の出土（57・70・123・125・145次ほか）、中国南方～東南アジアに生産地が考えられるガラス（カリガラス）小玉（6・145次、山王11次ほか）の多数出土やインド産とされる特異な赤褐色ガラス（ムチサラ）極細管玉（山王10次）の居住域での出土、基準質量での取引の存在を示す棹秤用の「石權」

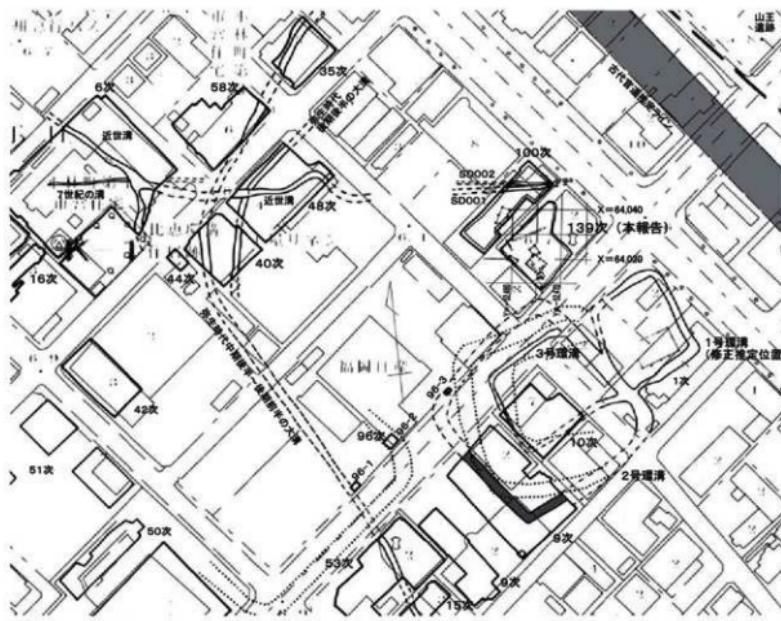


Fig. 3 比恵遺跡群139次調査地点の位置 (1/2,000)

の出土（125次）、東日本系（北陸産？）小型管玉の出土（145次）などからもうかがえる。長距離交易関係遺物では、今のところ中国銭貨（五銖錢、貸舟ほか）のみ出土がないが、福岡平野の比恵・那珂の衛星的集落（雀居、久保園、下月隈C、仲島遺跡）で出土があり、いずれ出土するだろう。これに関連して、比恵中央から北半部では、弥生時代から古墳時代前期にかけて、石錘・土錘・軽石製浮子、鉄製ヤス（鈎）、アワビオコシ・釣針などが出土し、海上を含む漁撈関係遺物が意外と多く、海上交易活動と漁撈を営む集団の居住が想定される。弥生時代では、鉄器は弥生時代中期末までにかなり普及していた証拠があり、出土する中期後半以降の木製鋤は、80%前後が鉄製刃先装着用とされ、農具というより段丘上での掘削に使用する「土木具」が大半であった。そのほか青銅製鋤先は一遺跡では最多数の出土である。比恵・那珂では青銅器・ガラス製品生産関係遺物も複数地点で出土し、須玖・岡本遺跡群のような極度の集中性はないが、銅型出土数では須玖・岡本遺跡群に次いでいる。

弥生終末期になると、比恵・那珂は再編成期を迎える。集落再編の軸として、先行する複数の「道路」状空間を直線的に結ぶように、比恵遺跡群中央北西部から那珂遺跡群中央部まで貫く延長 1.5km 以上の両側側溝を備えた「道路（メインストリート）」が造営され、それと同じ方位で一辺 70m と大型化する「2号環溝」が掘削される（久住 1999・2008）。後者は「王」の居館と推測され、その成立直後の古墳時代早期（弥生終末期後半）には、九州最古の前方後円墳である那珂八幡古墳が那珂中央に築造される。当初の「道路」の終点は那珂八幡付近とみられるが、その後古墳初頭にさらに南側に延伸され、その両側に前方後方形を含む古墳前期の小古墳群が次々と造営されている。「道路」の北側はこれまで不明確であったが、近年の調査（比恵 127・132・143 次）から比恵中央段丘北西部で緩やかに北に曲がることが判明し、試掘調査の諸成果と合わせ、比恵北部を横断する「水路」が湾入すると

推定される箇所に向かって延びると推定される。この湾入部分は、今後「船着場」遺構が検出される可能性があろう。さらに比恵南西部でも西から谷部が湾入した場所上に「道路」推定線が来るが（比恵 141 次南）、この谷部でも「船着場」や「橋」が検出する可能性もある。なお近年、古墳初頭前後に帰属する「石硯」が 2 点比恵で出土しているが（比恵 141・143 次）、いずれも「メインストリート」沿いであることが注目される。この比恵・那珂における「メインストリート」の造営途中、那珂八幡造営頃に、奴国の「主都」須玖岡本遺跡群は衰退し、青銅器工房群が途絶え、遺構も激減する。比恵・那珂に奴国の「主都」が遷ったらしい。比恵・那珂には那珂八幡だけでなく、弥生終末期古相に推定一辺 20m 前後の方形墓があり（比恵 120 次周囲推定）、これに接し「道路」沿いに終末期新相の推定全長 36m の前方後方墳があり（36・55 次）、さらに比恵中央部には弥生中期墳丘墓に接して、終末期新相成立の一辺 30m 以上の比恵 1 号墳がある（6・16・89 次）。比恵 1 号墳とそれに接する比恵 2 号墳（古墳初頭）の周溝には、西日本各地と朝鮮半島系土器（楽浪、馬韓）があり、交易を司る被葬者が考えられる。この周囲は漁撈具が多く出る地区であり海上活動の指導者でもあろう。比恵墳丘墓・1 号墳を取り巻くように「倉庫域」があることも注意される（Fig. 2）。比恵・那珂の居住域は、「メインストリート」や「2 号環溝」の造営により諸施設の方位が同じ方向を指向し、また墳墓域の再設定により居住域に変動があるなど「区画整理」が進むが、古墳時代前期前半では集落規模と遺構分布は保持される。ところが古墳前期後半には遺構が激減し、その後中期初頭から中期末までの遺構の分布は非常に疎らでごく僅かとなる。

その後、古墳時代後期以降に比恵・那珂の拠点化が再開される。この時期から飛鳥時代の詳しい説明は他に譲るが、古墳後期中頃（TK10 期；6 世紀第 2 四半期）の三重周溝を巡らす全長 75m の東光寺剣塚古墳築造後の、三重柵列+大型倉庫群（比恵 109・125 次→8・72 次、39 次）を嚆矢とする「那津官家」に関わる比恵・那珂の初期官衙関連遺構群の展開は、再び「都市」的様相を呈し、飛鳥時代前半までは、かつての「メインストリート」が再利用されて主要遺構が再配置されていることが判明してきたことが特筆される（菅波正人 2012、南秀雄 2018）。

（註 1）「環溝」の位置は比恵 9・10 次調査による「1・3 号」環溝の一部の再発見により、鏡山報告の環溝方位のズレが明らかになっており、その位置が推定補正されている（久住猛雄 2003、福岡市報 956 集）。

（註 2）ただし周囲の状況からの現在の知見では、この遺構は「住居跡」というよりは、弥生後期の「方形周溝墓」の可能性が高くなっている（Fig. 2）（久住 2008）。

<文献> 鏡山 猛 1956～1959「環濠住居址小論（1）～（4）」『史源』67・71・74・78 輯／久住猛雄 1999「弥生時代終末期「道路」の成立」『九州考古学』74、九州考古学会／久住猛雄 2000「奴国の遺蹟—須玖・岡本遺跡群と比恵・那珂遺跡群—」『考古學から見た弁・辰韓と後』九州・嶺南考古学会第四回同人会／久住猛雄 2003「北部九州における弥生時代の特定環溝区画と大型建物の展開」『日本考古学協会 2003 年度滋賀大会資料集』／久住猛雄 2008「福岡平野 比恵・那珂遺跡群—列島における最古の「都市」—」『弥生時代の考古学』8、集落からよむ弥生社会、同成社／久住愛子・久住猛雄 2008「九州 I—福岡県下における弥生時代から古墳時代前期の井戸について—」『井戸再考』第 57 回埋蔵文化財研究会資料集／菅波正人 2012「博多湾岸のミヤケ関連遺跡」『日本考古学協会 2012 年度福岡大会研究発表資料集』／武末純一 1990「北部九州の環溝集落」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会／田崎博之 1999「福岡地方における弥生時代の土地環境の利用と開発」『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会／中山平次郎 1917「九州北部に於ける先史原史兩時代中間期間の遺物に就て」(1)・(2)『考古学雑誌』第 7 卷第 10・11 号／中山平次郎 1925「古代の博多（一）」『考古学雑誌』第 16 卷第 6 号／南秀雄 2018「上町台地の都市化と博多湾岸の比較—ミヤケとの関連」『大阪文化財研究所 研究紀要』第 19 号／森本幹彦ほか 2015「新・奴国展」福岡市博物館特別展示図録／吉留秀敏 1989「比恵遺跡群の弥生時代墳丘墓—北部九州における弥生時代区画簿の一例—」『九州考古学』63、九州考古学会

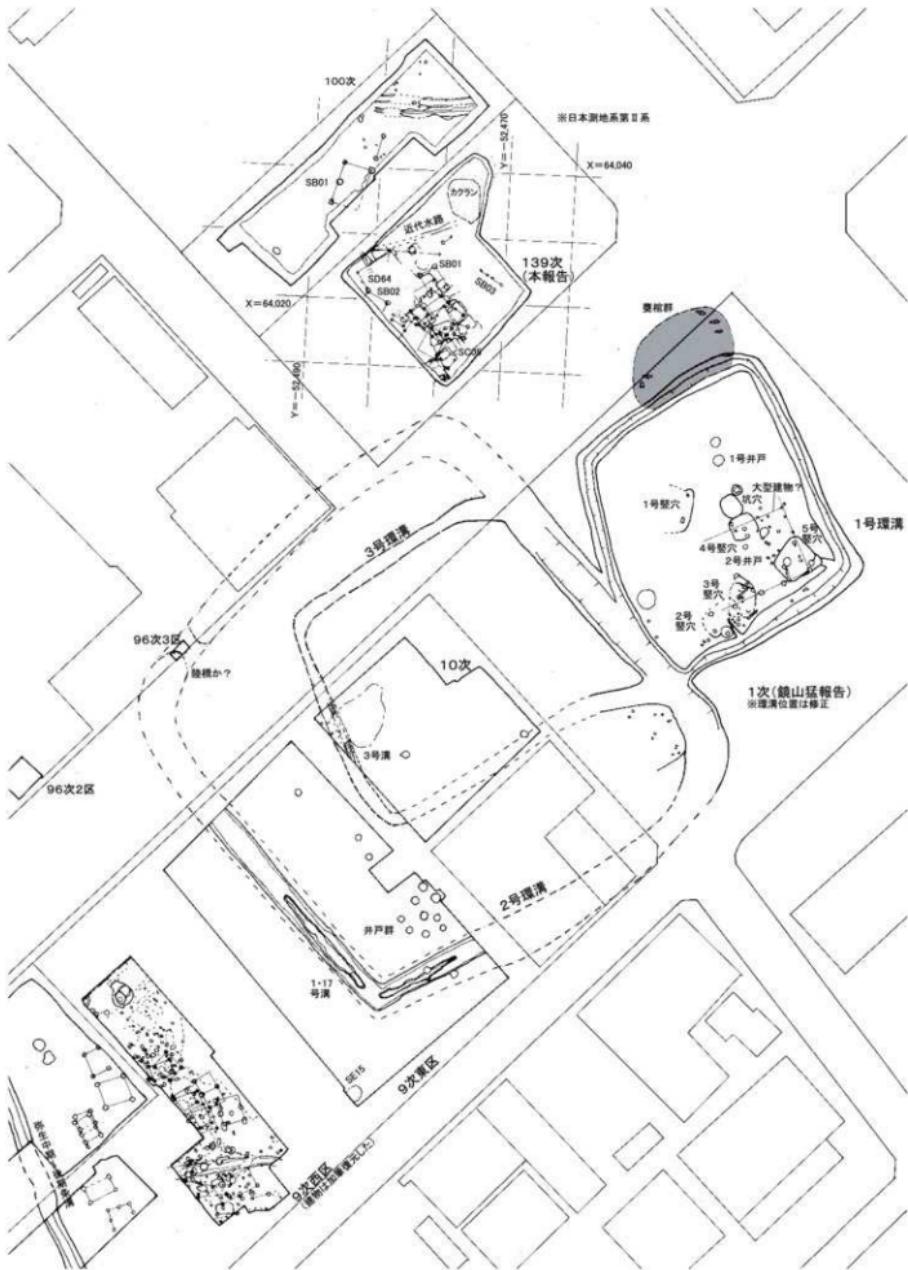


Fig. 4 比恵139次調査地点とその周辺 (1/750)

## II. 調査の記録

### 1. 調査の概要

比恵 139 次調査地点は遺跡群中央北東部に位置する (Fig. 2)。周囲の標高は、南側道路面で 6.5m 前後、調査区北西で 6.6m、北東で 6.2m であり、西側ないし南西側がやや高い。調査範囲は南西側および北側の I 区と、中央南側の II 区に分けている (Fig. 4)。敷地東半分の多くは事前の試掘調査の結果、削平と擾乱が著しいと判断し、調査対象となっていない。事実、調査区でも東側から北東部のほとんどが、基礎や近代以降の造成などにより著しく削平されたり基礎の擾乱が及んでいた (Fig. 4・7・9)。発掘調査の前半で調査区南・南西側から北西部および北東部までを L 字状に掘削して I 区とし、調査の後半で残りの東側約 1/3 を掘削している。調査期間 (約 3.5 ヶ月) の残り約 1 ヶ月の 9 月 28 日に反転している。I 区北側東半南部と II 区東半は、近年まであった建物基礎により擾乱・削平が顕著で、遺構は僅かであった。また I 区北側北部から東部は近世以降の水路や水田造成による削平が顕著であり遺構が僅かであった。しかし他の部分は、部分的に大きな擾乱坑があり遺構が失われている部分もあったが、基本的に遺構が非常に濃密に認められ検出時は「真っ黒」な状況であった (巻頭図版 3-6~9)。遺構が遺存しているところでは、現代の盛土ないしバラスからなる表土を 10~30 cm 除去した地山鳥栖ローム上面で遺構を検出した (Fig. 6 土層 4 参照)。検出遺構は、重複が顕著だったり遺存率が悪くプランが不確定なものが多いが、堅穴住居や方形堅穴が推定 30 棟 (基) 以上、土坑多数、柱穴多数、井戸 1 基、溝状遺構 6 条を検出した。柱穴群からは掘立柱建物を 20 棟以上、柵列区画を 2 基復元した。検出遺構の大半は、堅穴住居 (・堅穴遺構) や掘立柱建物の大半も含めて弥生時代中期から古墳時代前期のものである。一部に古墳時代後期から飛鳥時代のものがあり、また一部に近世遺構か近代以降の擾乱か区別できないものがある。また小砂利状粗砂が覆土に混入していて、当初「擾乱」と考えたが、重複関係や他の遺構 (掘立柱建物の柱穴組合せなど)との関係、粗砂を除いた覆土土壤の色や質から、最終的に弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と判断したものがある。このような遺構覆土の存在は比恵 134 次 (福岡市報 1237 集) などでも指摘されており、比恵遺跡群での発掘調査の際に注意すべきである。溝は弥生時代～古墳前期が 2 条、古墳後期が 1 条、他は近世以降である。

出土遺物は、弥生土器と古墳時代前期の古式土師器が大半で、他に古墳時代後期～飛鳥時代の須恵器・土師器、近世以降の陶磁器などがある。また、弥生時代～古墳時代の鉄製品、ガラス小玉、石器がある。その他、朝鮮半島系の弥生時代終末期以降古墳時代前期に併行する瓦質土器や陶質土器の破片が 3 点あった。遺構の濃密さや周囲の状況に比べると比較的遺物量は少なく、パンケースにして 18 箱の出土量である。これは一つには、井戸や大溝のような遺物が大量廃棄される遺構が調査区内にはほとんどなかったことと、遺構 (主に堅穴住居) の深度の遺存度が悪かったためであろう。

堅穴遺構 (主に堅穴住居) は、一部に弥生時代中期と考えられるものがあるが、多くは弥生後期から古墳時代前期で、弥生後期、弥生終末期、古墳初頭、古墳前期では方位が変化している傾向がみられた。これは南西側に分布する「環溝」群の変遷と関係する可能性が高い。弥生後期以前の明確な遺構は少ないが、須玖 I ～ II 式の弥生中期土器は少なくなく、遺構の重複で失われたとみられる。多数の柱穴には掘立柱建物が復元できるものがあり、古墳初頭の SB01 とした 1 × 1 m の建物は、柱穴掘り方が径 1 m と大きく、検出当初は井戸と誤るような径と深さ (検出面から 1 m 前後) であり、「物見櫓」 (櫻観) 的な高層建物であった可能性がある。SB02 (弥生時代中期後半) も 2 柱穴の遺存 (中間に小規模な東柱あり) だが同様の建物だろう。他に、「平地住居」の可能性がある梁間の広いや大型の建物が複数あった (SB05・07・08・11)。このような建物跡の存在や「復元」はこれまであまり認識されていないので、今後注意を要する。また周囲で多い井戸が 1 基のみであったことも興味深い。

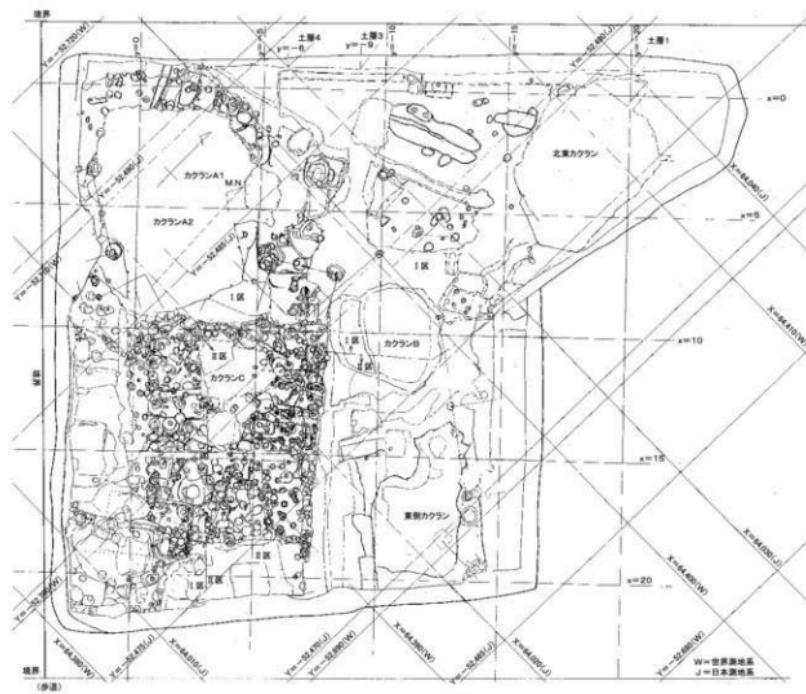
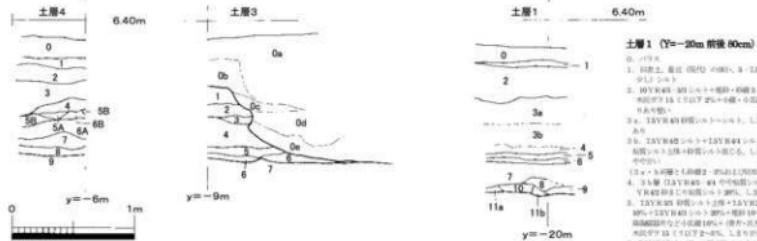


Fig. 5 比惠139次調査区全体図（概要図）（1/200）



比東1.3.9次數轉化率與兩位狀元

土壤4 (Y=1km から下限 6km)

0.177 \cdot 30 = 53\% \approx 53\% \text{ (上 + 53\%)}

3. 家庭用の、ESY和算器のB9+BNV R43 電球まで

2. TAY-HK 10146-455 レトロモードはTAY-HK-750+回路より下で2%、本体壁面、しまりあ、  
壁面より上。  
3. 3-25VDC40mAで初期シルトモードTAY-HK44+回路  
モードはTAY-HK44+回路より下で75.2%、4  
回路10+モードは15%初期値より下で2%~95%の  
範囲。しまりあへており、回路基板、2層板も表示  
される。

圖 3-20—9-5 施肥 100—鉻鉛



卷之三



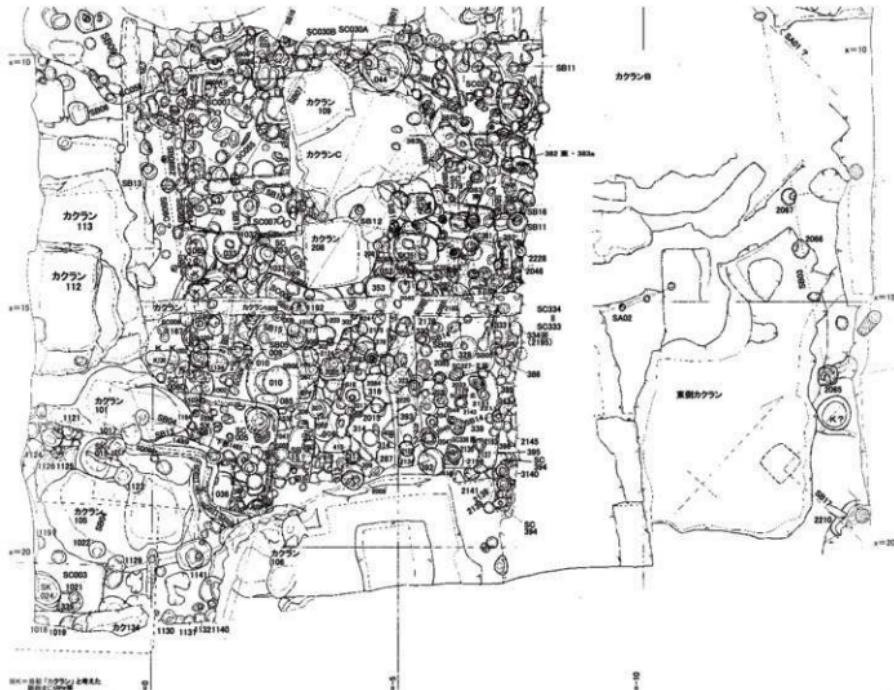
Fig. 6 比惠139次北辺壁面土層図 (1/40)

なお遺構検出面までの土層は調査区北辺で記録した (Fig. 6・28、巻頭図版 4-19-21)。遺構検出面の多くは鳥栖ローム上面だが、調査区北半中央～北東側、調査区東側ではさらに削平され八女粘土層であった。それでも遺存する柱穴は大型建物、高床建物、竪穴住居柱の一部などだろう。鳥栖ローム遺存範囲では、「真っ黒な包含層状」検出面は地山ロームが分かる部分が少なく、遺構プランが明確になるまで下げて 2、3 回検出作業を行い、結果的に遺構、特に竪穴住居覆土が極めて浅い遺存状態になつたところが多い。また I 区北西部、II 区主要部など遺構が濃密かつ重複関係が複雑な箇所では、遺構平面図を 2 回に分けて記録し、2 回目の記録を便宜上「2 面」とした (Fig. 10-12, Pl. 3-2, Pl. 8-3-5-7、巻頭図版 3-11)。しかし、整理作業段階で下面検出遺構の一部は上面から存在したものと推測するに至った場合もある。さらに、小ピットを含む検出遺構の大部分は検出時の覆土の土色などを簡単に記録しており、建物の復元推定の参考とした。ただし、遺構覆土色の大半は、『標準土色帖』の「黒褐色」「極暗褐色」、一部「暗褐色」であり、その範囲内での土色とロームブロック・粒子を含んだ土の混じり方やしまりなどの微妙な相違の幅内での遺構プランの判断と検出であった。

## 2. 検出遺構

### (1) 竪穴住居・竪穴遺構 (SC) (Fig. 13-17・19-24・34-36)

土坑としては大きく (1.5m 以上)、方形 (長方形、小判形状含む) ないし略円形で、壁の立ち上がりが比較的急またはそう推測されるもの、貼床掘方痕跡や壁周溝痕跡、壁際ピット列痕跡で方形プランの辺や隅角と推定できたものを「竪穴」とした。ただし、一辺 2m 前後以下のものは「住居」など



うか疑問で、「**堅穴状土坑**」や住居以外の「**堅穴建物**」の可能性がある。また主柱穴が無い場合があり、むしろ主柱穴が明確な「堅穴住居」は本調査区では少ない。さらに遺構が濃密だったので、平面プランが明確に把握できたのは一部であり、やや不明確なものを矛盾が少ないとつなぎ合わせて推定したものもある。しかし整理段階で推定復元した堅穴住居も、その各「辺」や「隅角」痕跡は、現場時点でも「堅穴」の一部と予測していた。ただし「壁」の立ち上がりが遺存せず、貼床痕跡（掘方凹み）や壁周溝・壁際ピット列で推定した「堅穴住居」は、重複関係が不明確なものも生じている。

• **SC005** (Fig. 13~16、裏表紙写真、巻頭図版 4-12、PL. 1-3・4、PL. 2-1・2) 1 区南西南部で検出した略正方形または長方形。略正方形とした場合 (Fig. 13)、 $2.2 \times 2.45m$ 、西側まで延びる長方形とした場合 (Fig. 15)  $2.2 \times 3.6m$  (以下、略南北→略東西の順で記す)。床面が平面的 (Fig. 13) にも土層断面 (Fig. 14) でも 2 面認められ、平面形も変化したとみられ、古相は二本主柱長方形住居とみられる。N-37.5°-E (以下、方位は国土座標北を基準に N-0°-E/W で表記するが、長軸短軸に問わらず 45 度以内の方を記す)。出土遺物は主に古式土器である (Fig. 37-1~22)。弥生土器も混入するが、小型精製土器や布留系甕の型式から **II C 期** (久住猛雄 1999-2017) に廃棄されたとみられるが、床面が 2 面あり、住居の造営は一つ古くに遡る (**II B 期**) だろう (Fig. 37-14~15)。SD002・011、SX035 が SC005 を切る。

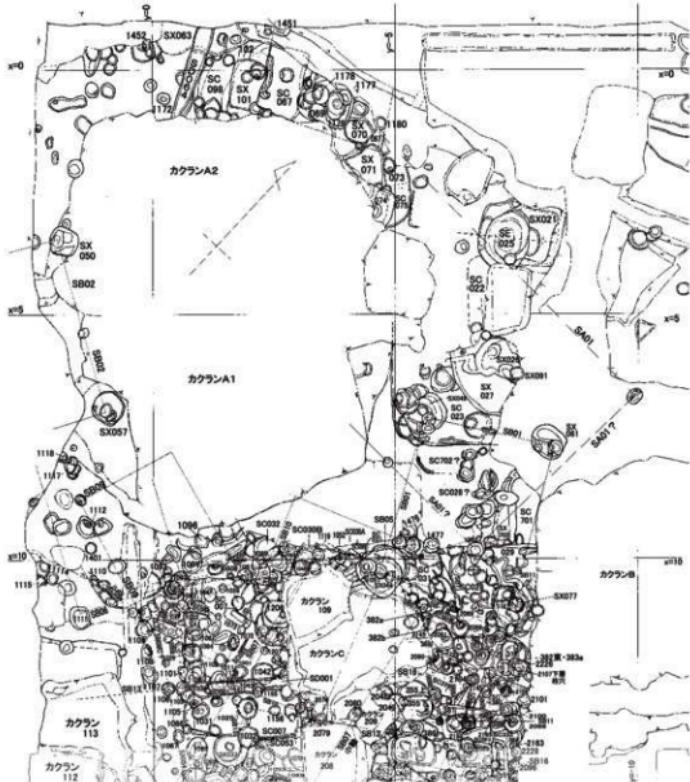


Fig. 8 比恵139次調査区北西部～中部平面図 (1/100)

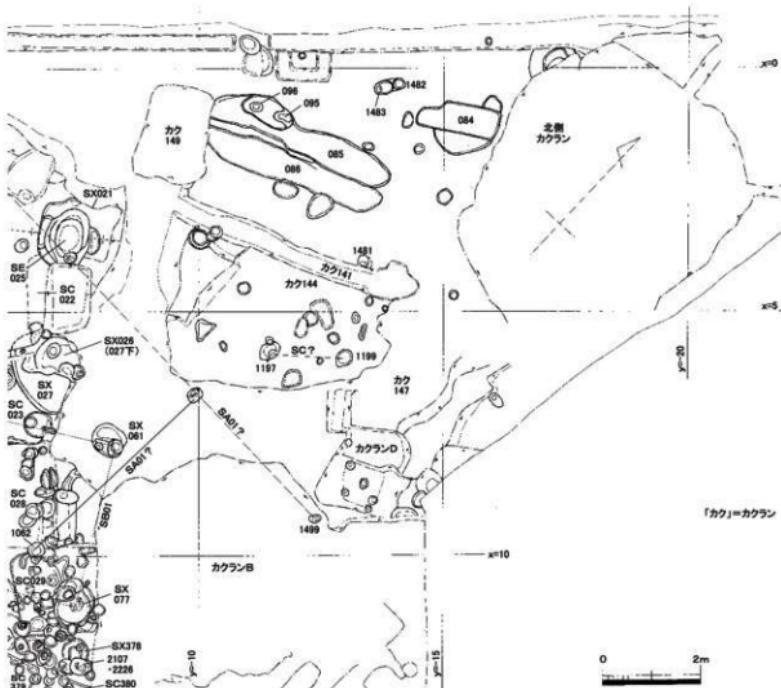


Fig. 9 比惠139次調査区北部平面図 (1/100)

- **SD007** (Fig. 19, PL. 1-5, PL. 2-4) I 区南西中央で検出。南側で **SD001** が覆土を切る。3.44×2.46m、N-45°-W。覆土がごくわずかしか残らず、西隅角部分は検出面直下にベッド遺構があったとみられ、南東側も新しい SD001 の真下に隠れて仕切り溝があり、さらに直交する小溝があって、ここにも貼床（盛土）ベッド遺構があった可能性がある。主柱穴は無い。**炉址**（焼上面）は中央より南側に偏っている。覆土がごく浅いためか、時期を示す土器片の出土がない。方位から古墳初頭前後か。

・**SC003** (Fig. 17-18, Pl. 1-1 上半) I 区南隅で検出。2.65m 以上 × 2.5m 以上。**SP1129** が二本主柱の主柱穴の一つ、床面検出の **SX (SK) 024** (Fig. 18、巻頭図版 4-20) が屋内土坑で中軸に来るとして、推定 3.0m × 推定 4.7m 前後か。N=42.5°-W。SC007 と同様に覆土は非常に浅い。貼床を一部で確認した。出土土器は、住居覆土は図示できるものがないが、**SK024** から**古式土師器**が一括出土した (Fig. 38-5 ~ 10)。7, 8, 10 の精製土器が確実に伴い、小型丸底壺 7 は「I c i 類」(久住 2017) の粗製化傾向型式で**ⅢA期古相**、対称性を失った粗製化傾向の脚付鉢 10 も同様である。この竪穴周縁の上面で**ⅢA期古**～新相の布留系甕や小型丸底壺が出土し (Fig. 40-12・14・18・19)、古墳前期遭構群の終焉時期を示す。

- ・SC327 (Fig. 19, PL. 6-6) II 区で検出。2.9×2.2m の長方形。N-44°-W。SP2215-SP2176 の二本主柱としたが、柱穴は浅い。貼床がある。出土遺物は弥生中期土器が主体だが、布留系壘破片もある (Fig. 37-30~33)。重複関係から後者の時期まで下る可能性があり、前者の時期ではない。やや上層だが石包丁が出土し (PL. 6-7)、型式観から中末期～後期前半とされるが (Fig. 43-2, 42 頁)、混入か。SC327 に切られる SC337 (=339) が II A～II B 期 (古墳初頭) であり、II B 期かそれ以後である。

・SC333 (=334)

(Fig. 19) II 区で検出。遺構番号が混乱して、北半を「SC334」としたが、「334」は別遺構もある (Fig. 37-27 の須玖 I 式甕片は別遺構か)。2.2m × 0.36m 以上の推定長方形。N-44° -W。

SC327 に切られ、その直前時期か。

・SC023 (Fig. 20, PL. 4-2) I 区中央で検出。

2.0m 以上 × 2.1m 以上の方形。N-45° -W。覆土は非常に浅く、壁周溝が断続的に廻る。

SX048 (SB01) と SX027 に切られる。出土土器に弥生後期前半の甕口縁部がある (Fig. 37-25)。

・SC337 (=339)

(Fig. 21 上、PL. 6-8) II 区で検出。遺構番号は、「337」・「339」両者のラベルがある。略南北 1.9~1.96m、略東西は西辺が 2 痕跡あり、2.55

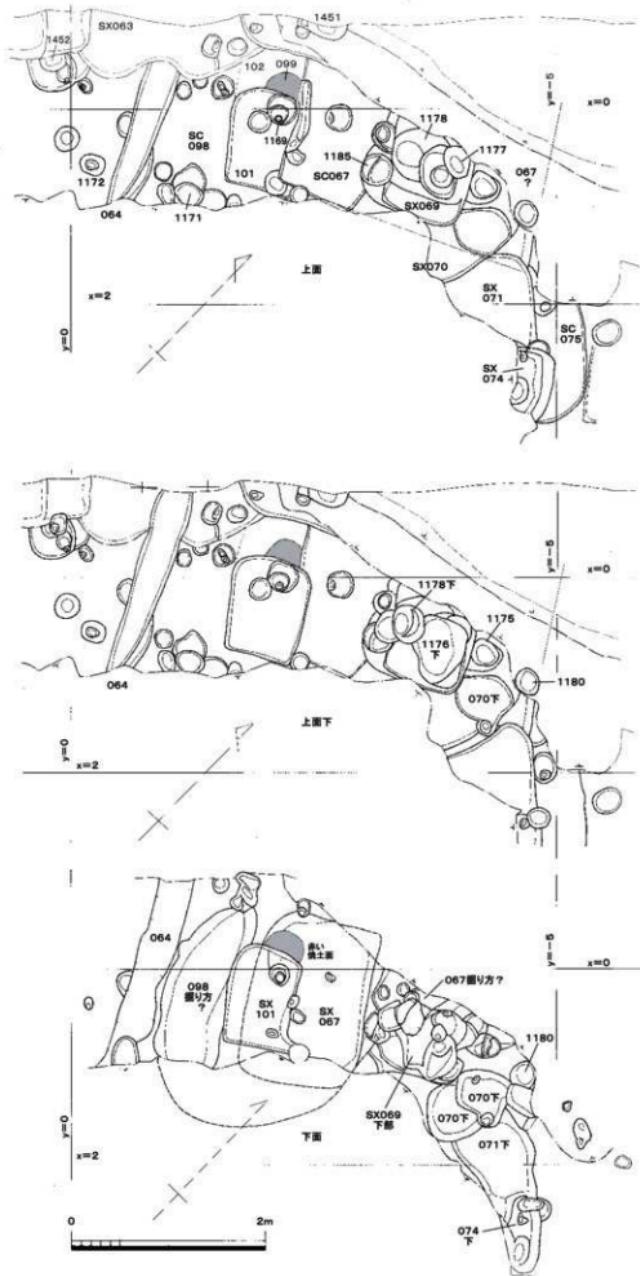


Fig. 10 I 区北西部平面図（上面、上面下、下面）(1/50)

~2.68m, N-43.5° -E。床面は南側が高くベッド遺構だが、北側は貼床で同じレベルに(再)整形され、2時期の床面か。平面規模が小さく、バランス的に北側SC327下部にもベッド遺構の存在を考える。南辺SP2176は屋内土坑の可能性。主柱穴はない。出土土器に弥生中期後半の土器片があるが(Fig. 37-26・28)、混入だろう。「SX339」出土に古式土師器のB系壺や精製二重口縁壺頸部片がある(Fig. 39-22・23)。床面で三韓系瓦質土器壺底部小片が、覆土から陶質土器無文短頸壺片が出土した(Fig. 39-21・20)。SC327に切られ、ⅡA期に造営、建替えがあり、ⅡB期廃棄と考えられる。

- SC382=383a (Fig. 21左下) Ⅱ区で検出。当初「SC382」としたものはいくつかに分かれ、「382西」の一部(382b)と「382東」はSC383と同一と判断した。SC382aを切り、SC379・380に切られる。た

だしSC383は後述するSC029に近い方位軸で北辺が接する「382d(383b)」に切られている可能性がある。  
1.3m以上×  
2.2mの不整方形(東辺が湾曲する山型食パン形)。  
N-33.6-W。  
SC382東出土土器に古式土師器精製高杯片があるが(Fig. 37-29)、重複関係から混入だろう。

SC383出土土器には、弥生後期中壇の壺底部があり(Fig. 40-5)、SC383a・bのいずれかの時期だろう。

• SC381 (Fig. 21右下) Ⅱ区で

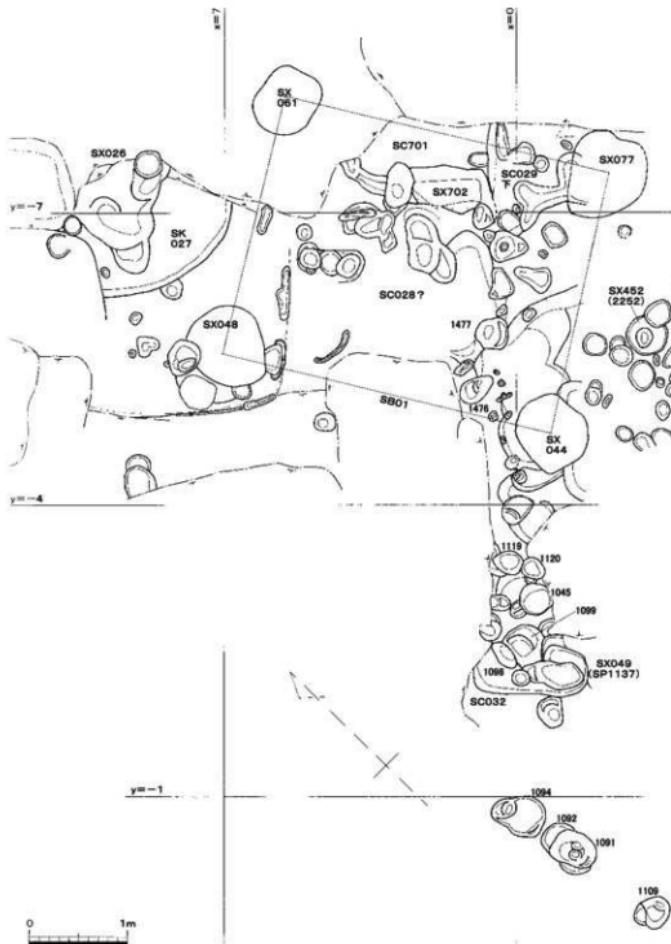


Fig. 11 I区中央部～中央北部下面平面図 (1/50)

検出。SC327 に切られる。0.7m 以上 × 1.48m 以上。N=35.5° -E。北辺に壁面周溝またはその掘方がある。出土土器に古墳初頭の「B系甕」(久住 1999-2017) の底部片があり (Fig. 37-27)、**II A 期** (古墳初頭) だが、遺構の時期を示すか検討を要する。遺構の方位は「3号環溝」北辺等に近く、**弥生後期か。**

• **SC379** (Fig. 22 上左) II 区で検出。3.78m × 1.65m 以上。N=17° -E。主柱不明 (無し?)、北側は明確な覆土と壁周溝痕跡があるが、南東側は床面痕跡のみでピット列が壁を示すと考えた。床面は北側がやや低く、中央から南側が僅かに高くベッド遺構の可能性があるが、西端は不明。**SC381** に切られる。時期を示す出土遺物は無い。方位から**弥生後期の幅内** (「1号環溝」西辺に近い) を考えておく。

• **SC380** (Fig. 22 上右) II 区で検出。2.5~2.7m × 1.58m 以上の不整長方形。南・北辺がやや湾曲する。N=18° -E。



Fig. 12 I 区南西東辺部～II 区西半部下面 (第2面) 平面図 (1/50)

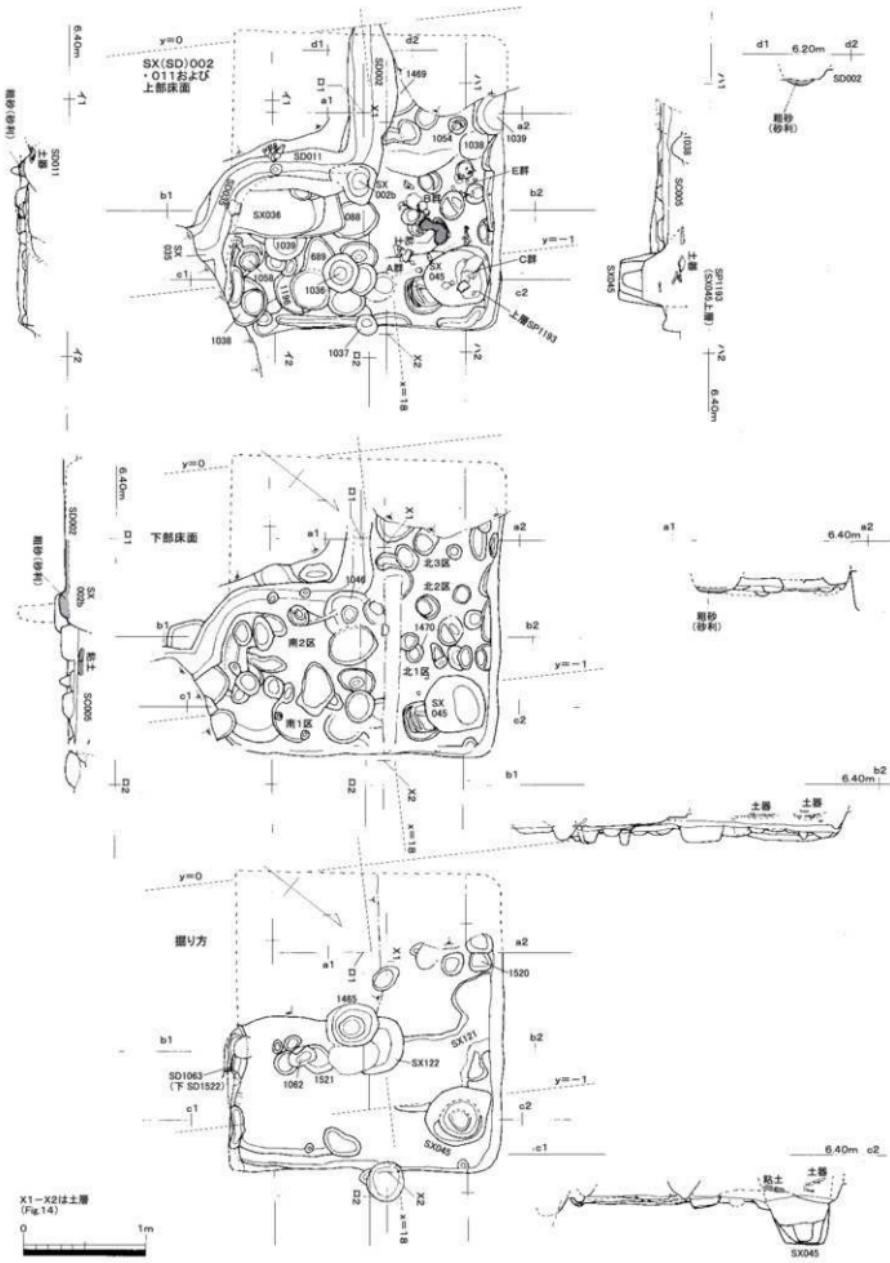


Fig. 13 SC005、SX (SD) 002・011実測図 (1/50)



(ウスア)はロームブロック多い屋

### 50035 東西ベルト (Fig. X2-III) 土面

1. 3.7Vモード+2.2Vモード+トヨタEV4/4ドライブプロトコル+EV4モード=6ドアロム15%以下T5W、日産純正部品付合計、シマツルームヘッドランプ
  2. 3.7Vモード+4.0Vモードシート(1層)モード+EV4モード+トヨタEV4モード=6ドアロム15%以下T5W、シマツルームヘッドランプ、日産車で多く販売
  3. 3.7Vモード+4.0Vモードシート(2層)モード+EV4モード=6ドアロム15%以下T5W、シマツルームヘッドランプ、日産車で多く販売
  4. 3.7Vモード+2.2Vモードシート+トヨタEV4モード+EV4モード=6ドアロム15%以下T5W、シマツルームヘッドランプ、日産車で多く販売
  5. 3.7Vモード+2.2Vモードシート+トヨタEV4モード+EV4モード=6ドアロム15%以下T5W、シマツルームヘッドランプ、日産車で多く販売

Fig. 14 SC005東西ベルト (Fig.13・X1-X2) 土層図 (1/30)

統的に壁周溝がある。あるいは周囲にあったベッド状遺構が削平されたか。出土土器に弥生後期後半の甕口縁部片がある(Fig. 37-24)。方位的には「3号環溝」東辺、「2号環溝」に近い。

- ・**SC394** (Fig. 22 右下) II 区南で検出。SC337 に切られ、攪乱で多くが欠失する。1.20m? (以上) × 2.84m, N=37.5° -E。主柱穴はない。南北方向が短く、削平されたベッド構造が両側にあった可能性を考える。時期を示す土器片がなく、詳細な時期は不明。方位は、「1号環溝」南北辺にやや近い。
  - ・**SC030A=SC053=SC382a** (Fig. 23 上) I 区中央南で検出の「**SC030**」の一部と II 区検出の「**SC382**」の一部、I 区南東検出の **SC053** を同一と判断したもの。南東隣は壁固溝痕跡で推定。SC007、SC382=383、

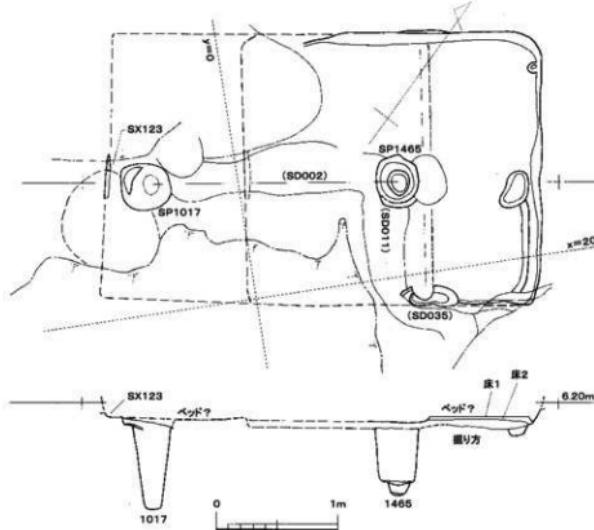


Fig. 15. SC005実測図(?) (1/40) 継2本ま枝の場合

SC379 ほかに切ら  
れる。4.2×4.5m、  
N-24 5° -

**SP2080** の柱痕の  
一つは二本柱柱穴  
の南側だろう。

**SB07**とは、方位はややぶれるが、ほぼ同一範囲で重複する。**SB07**が新しいが、SP2080を共有し、**堅穴住居**を**平地建物**に建替えた可能性が高い。SC382a 出土土器に外傾接合の**半島系無文土器**があるが(Fig. 40-4)、

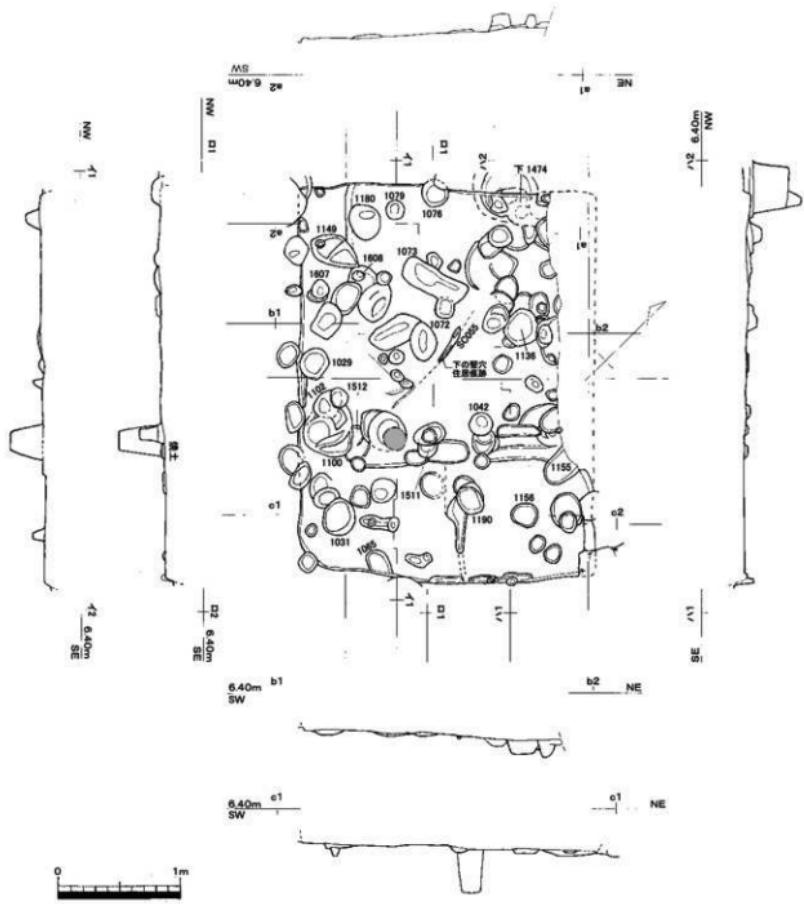


Fig. 16 SC007実測図 (1/40)

口縁部を欠損し時期不明である。遺構の時期を示すか不明。おそらく、遺構は**弥生後期の幅内**だろう。

- **SC056** (Fig. 23 下) I 区南西部で検出。壁周溝と壁際ピット列の一部が「残る。4.5m×0.9m以上。N=19° -E。出土遺物に乏しく時期不明瞭。SC379・380などの方位に近く、おそらく**弥生後期の幅内**か。
- **SC376** (Fig. 24) II 区で検出。北側隅角前後の壁周溝と壁際ピット列から推定。東辺は次のSC318B・318C (=424) と同一か。2.47m×2.26m、N=26° -W。主柱不明(なし?)。SC339とSC327、SC314に切られ、SC318と重複するが、ほぼ同一範囲、同一方位であり、SC318の建替えの最後の堅穴住居だろう。時期が不明確だが、おそらく**弥生後期～終末期**。
- **SC318=424** (Fig. 24) II 区で検出。掘り込みは南西隅～西側 (SC424) のみ僅かに遺存し、壁周溝と壁際ピット列から推定。主柱はやや浅いが、SP2176 - 2131の二本主柱。壁周溝の遺存と推定壁際ピット列から3時期の建替えで、318A=424→318B=424→318C=424と変遷すると考える。いずれもN=26° -W。318Aは3.82m×2.7m、318Bは3.3×2.6~2.7m、318Cは3.45×2.6~2.7m。SC318Cの南隅

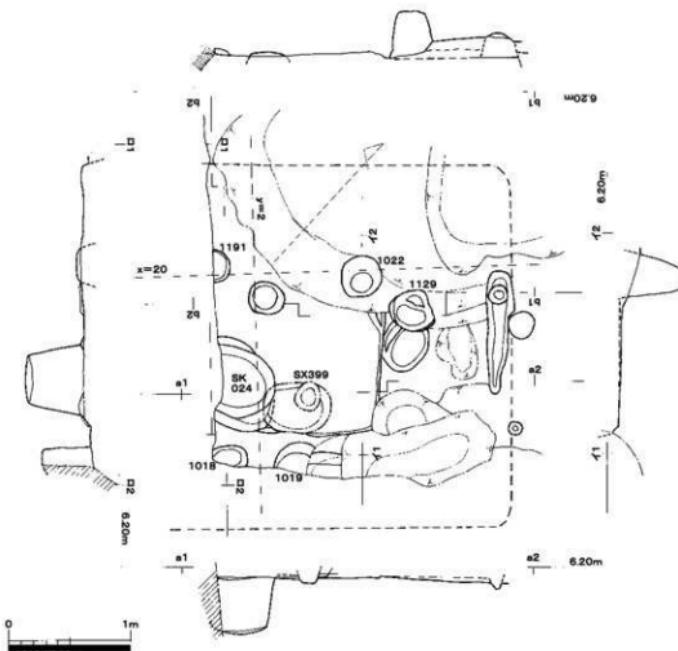


Fig. 17 SC003実測図 (1/40)

掘方とみられる **SX494** (Fig. 12) から精製二重口縁壺口縁部片が出ており、(Fig. 40-10)、切り合いで関係と矛盾し、この個体は上部柱穴などの掘り残しからの出土と考える。SC376 が弥生終末期（I B 期？）の SC314 に切られるから、**SC318** は弥生後期～終末期前半までの幅内と考える。

- ・**SC313=416** (Fig. 24) II区南側で検出。南西・北辺側を**SC313**、東側隅角を**SC416**として検出し、同一と判断した。2.2m×3.5m, N-31°-E。わずかな遺存だが、「313」南西側は比較的の遺存する。**SC314**および、**SC318**と**SC308**にも切られる。時期は、「3号環溝」南辺の方位に近く、**弥生後期の幅内**か。



Fig. 18 SK (SK) 024実測図・土層図 (1/30)

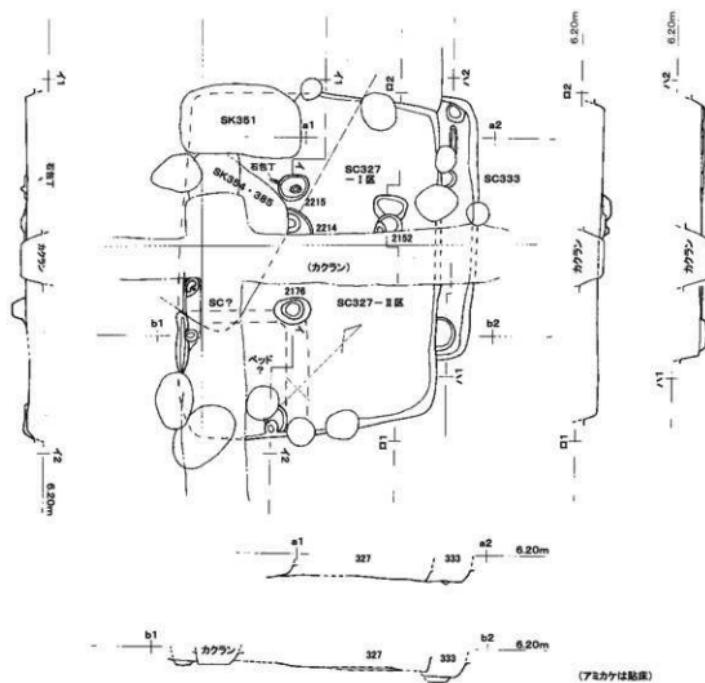


Fig. 19 SC327、SC333実測図 (1/40)

・SC314 (Fig. 24) 非常に浅いが南隅角付近の掘方壁を検出した。SC308、SC318=424、SC376を切る。1.28m以上×1.25m以上で延長・対角不明。N-1°-W。出土土器に弥生終末期の在来系甕口縁部がある(Fig. 39-27)。SC339 (II A期造営) に切られ、その時期でも矛盾しない。

・SC308 (Fig. 24-34) II区南側で検出。SC314とSC391に切られるが、SC006=302との関係は微妙。「308」も隅角部の「308B」と、その下に微妙に方位の異なる古い「308A」がある。いずれも僅かな遺存で、掘方のみの

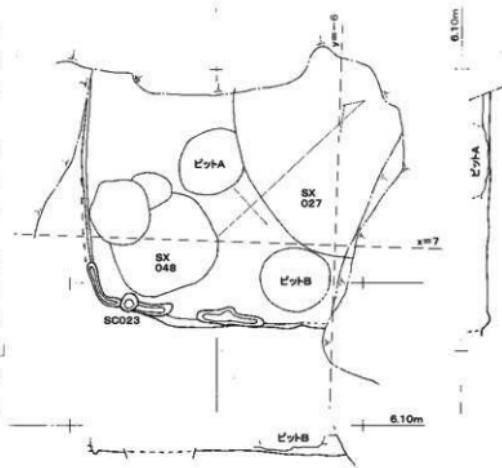


Fig. 20 SC023実測図 (1/40)

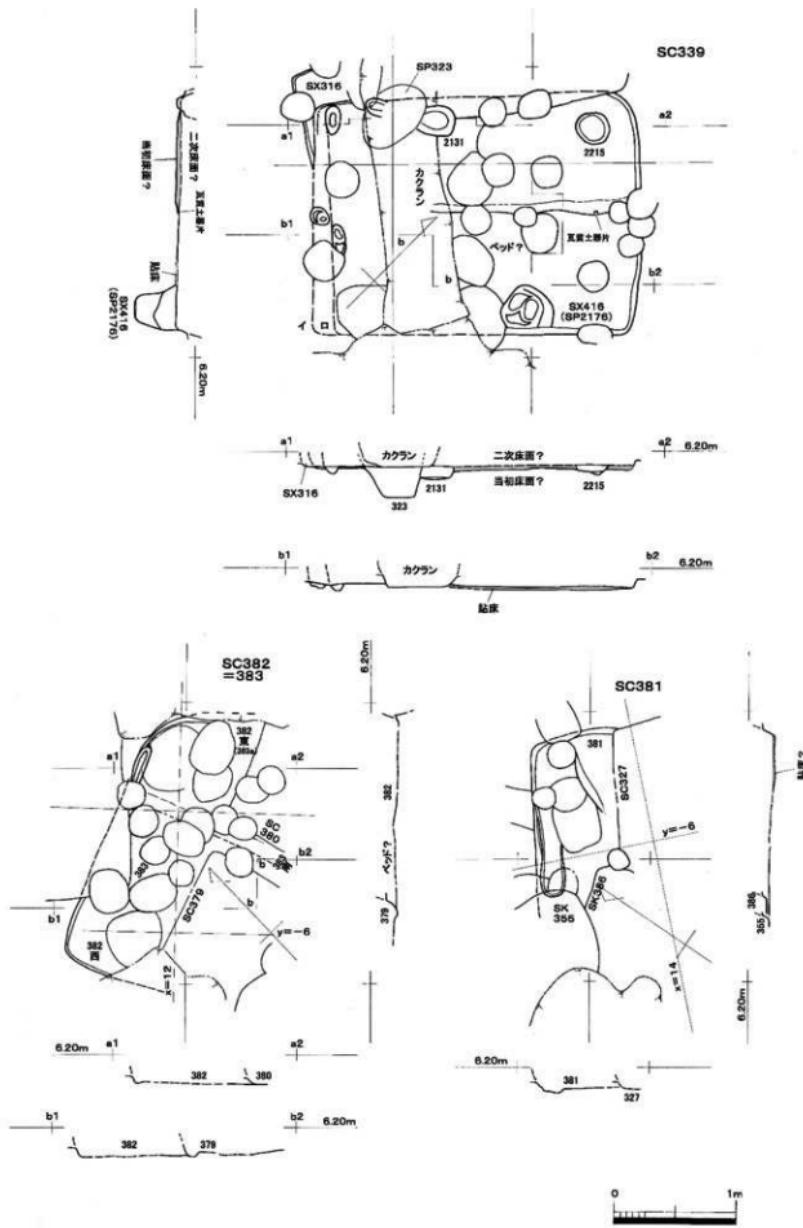


Fig. 21 SC339、SC382=383、SC381実測図 (1/40)

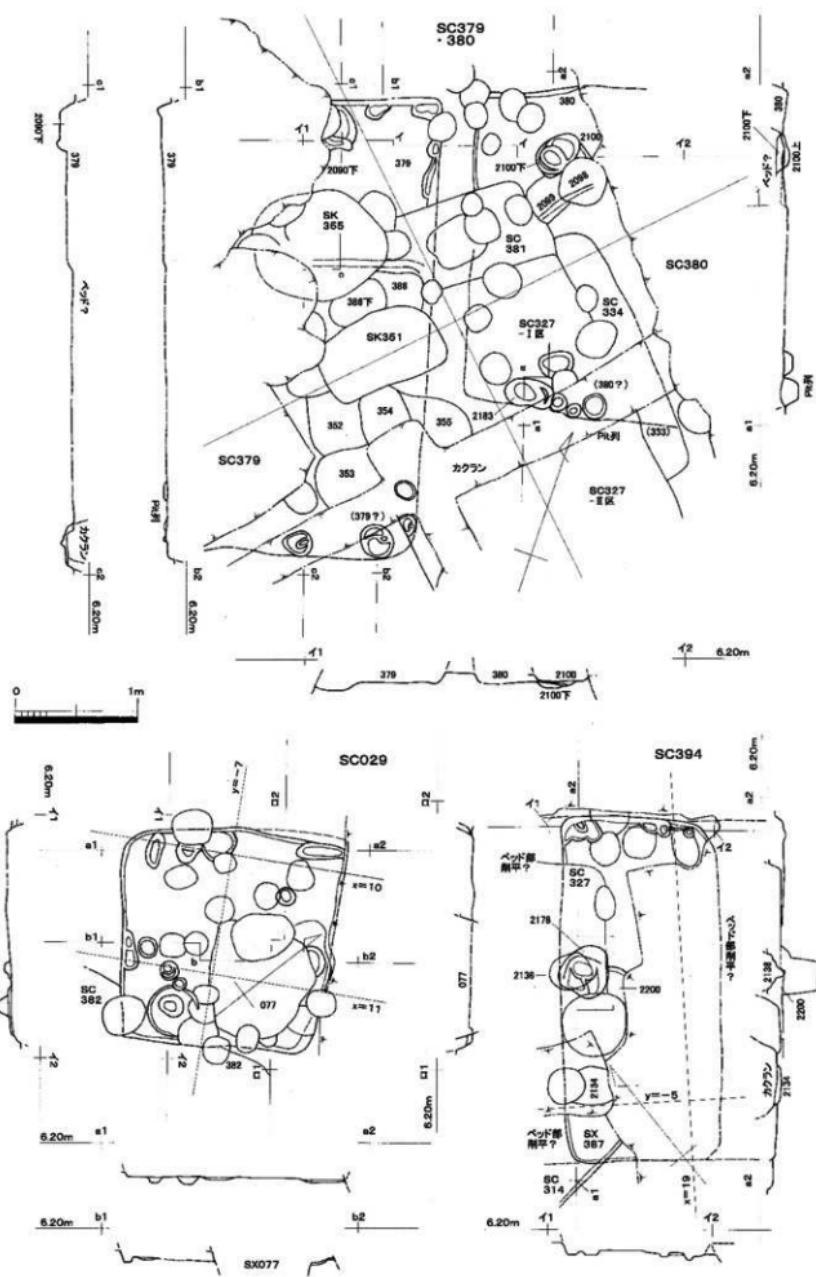


Fig. 22 SC379・380、SC029、SC394実測図 (1/40)

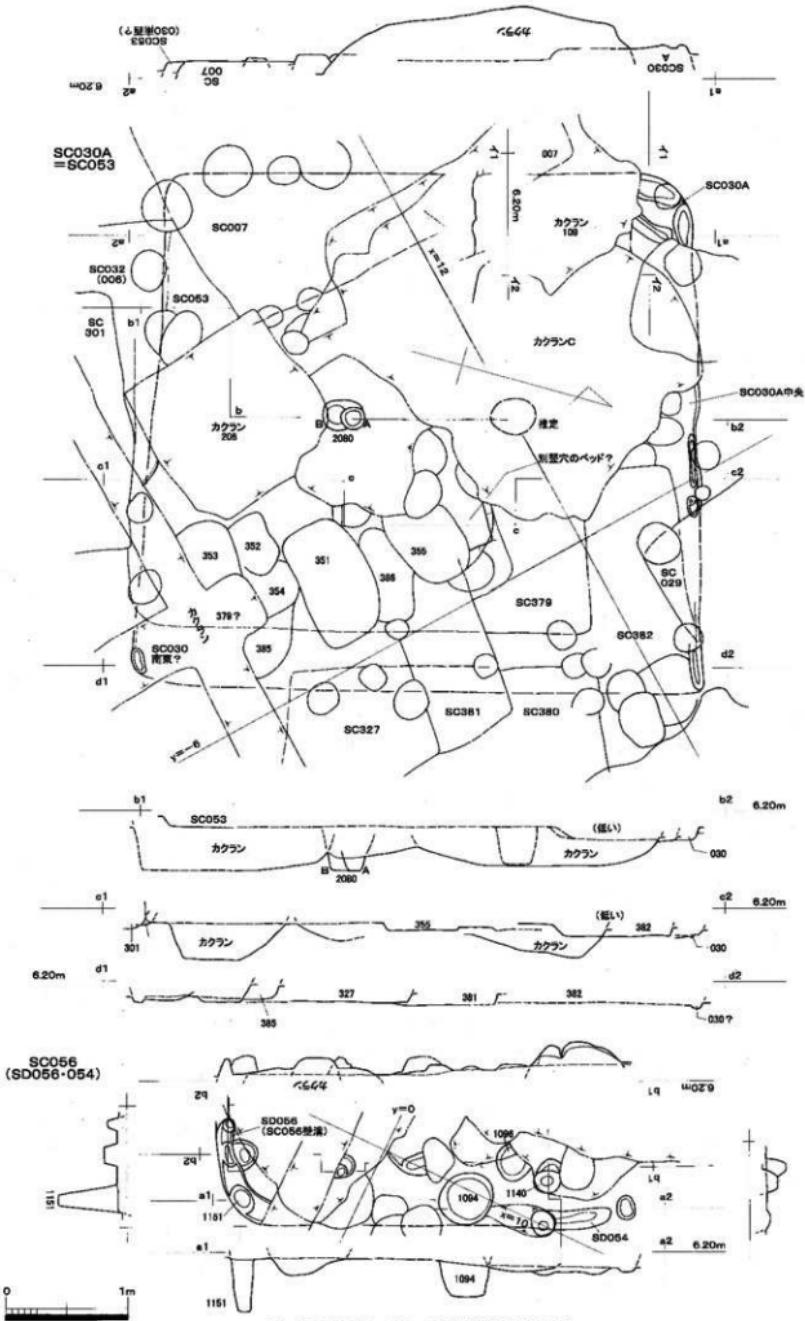


Fig. 23 SC030A=053、SC056実測図 (1/40)

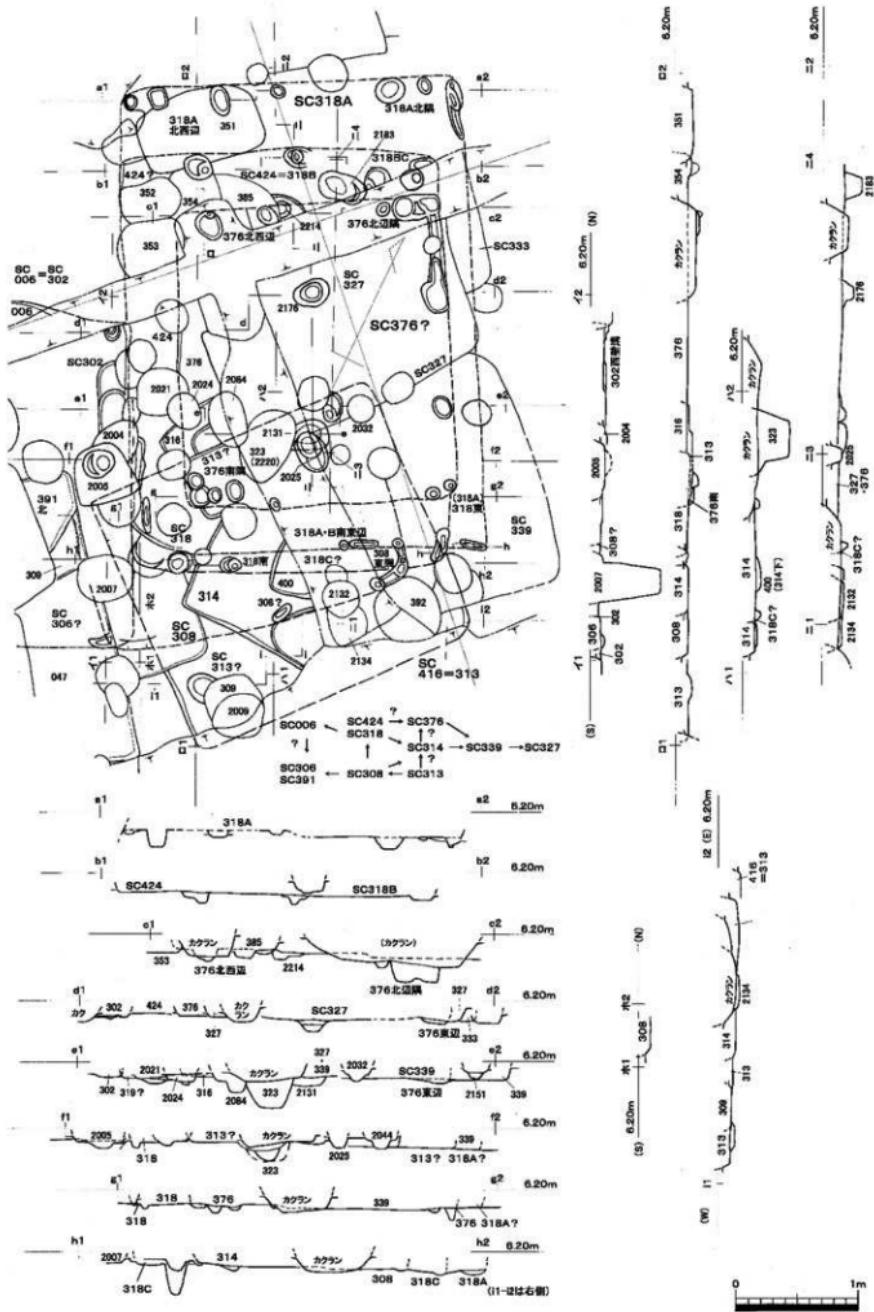


Fig. 24 SC376、SC318=424、SC308、SC313=416、SC314実測図 (1/40)

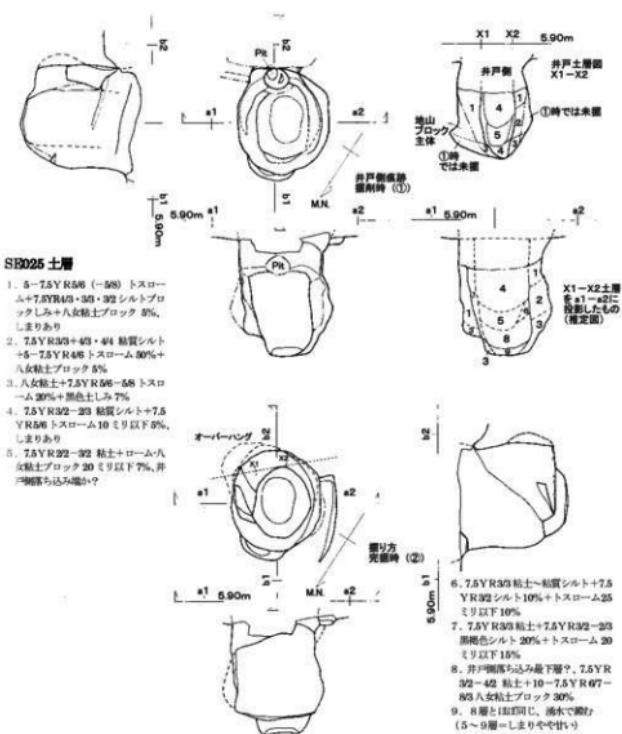


Fig. 25 SE025 実測図 (1/50)

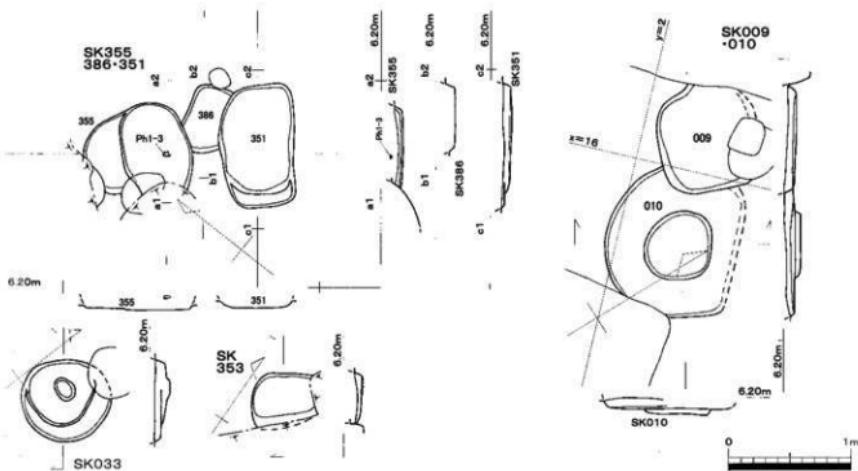


Fig. 26 土坑実測図 (1) (1/40)

遺存・検出の可能性がある。308A は 1.0m 以上 × 0.3m 以上、N-31° -W、308B は 略南北 1.0m 以上 × 略東西 0.75m 以上、N-44° -E。出土土器に 弥生後期後半～終末期 の壺胴部片が ある (Fig. 39-25)。おそらく弥生後期後半の 遺構であろう。なお 308A の方位は SC006=302 に近く、308B の方位は SC391 に 近いので、006=302 → 308A→308B→391 とい う変遷が最も矛盾が 少ない。

• SC006=302 (Fig. 34 上、Pl. 4-1) 1 区 南西部東縁と 2 区南西 部にまたがる。北西側から西側を「SC006」、 北隅角付近から東側は 「SC302」、 北辺は一部

「SC301」、南辺の一部の掘方回みは「306」として検出したが、同一と判断した。北辺のみ掘り込みが比較的明瞭だが、他は僅かな遺存で、掘方や壁周溝のみの検出である。西辺「006」が2辺に分かれ、2時期（建替）が想定される。2.85m×1.95～2.1m、N-26.5°-W。出土遺物に乏しく、時期は不明瞭だが弥生後期だろう。

- ・**SC391** (Fig. 34 上) II区南縁で検出し、一部のみI区側。西辺は一部のみ遺存。SC005に切られ、SC006とSC308を切るらしい。2.45m×1.9m、N-40°W。出土遺物に乏しいが、重複関係から弥生後期後半～終末期だろう。

- **S067** (Fig. 10・34 下, Pl. 3-3-4)  
I 区北西側で検出。1.45m 以上×2.6  
~2.7m, N-29.5°-W. 挖り込みは浅い  
遺存。SX069 に切られる。やや歪つた  
が方形住居で、四本主柱の可能性があ  
る。貼床がある。出土遺物に乏しく時

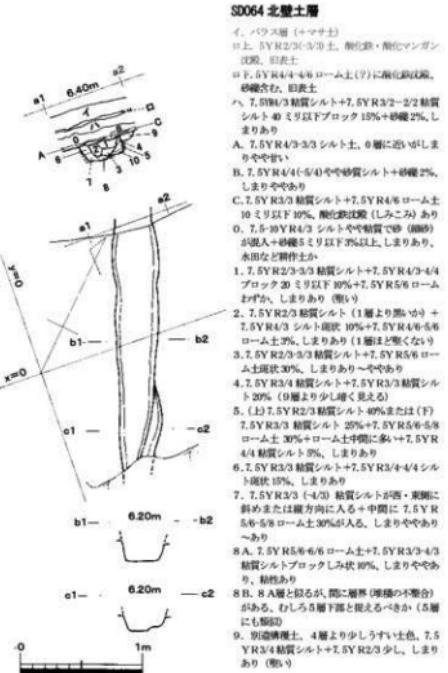


Fig. 28 SD064実測図・土層図 (1/40)

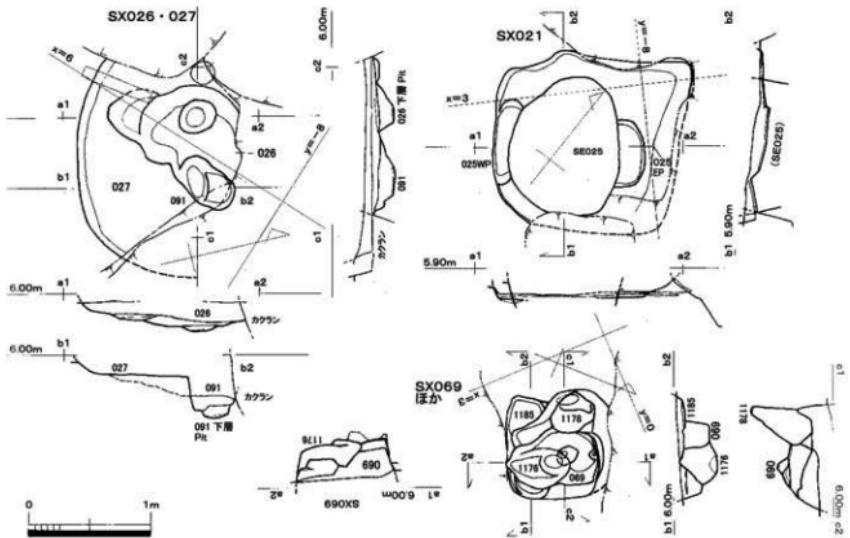


Fig. 27 土坑実測図 (2) (1/40)

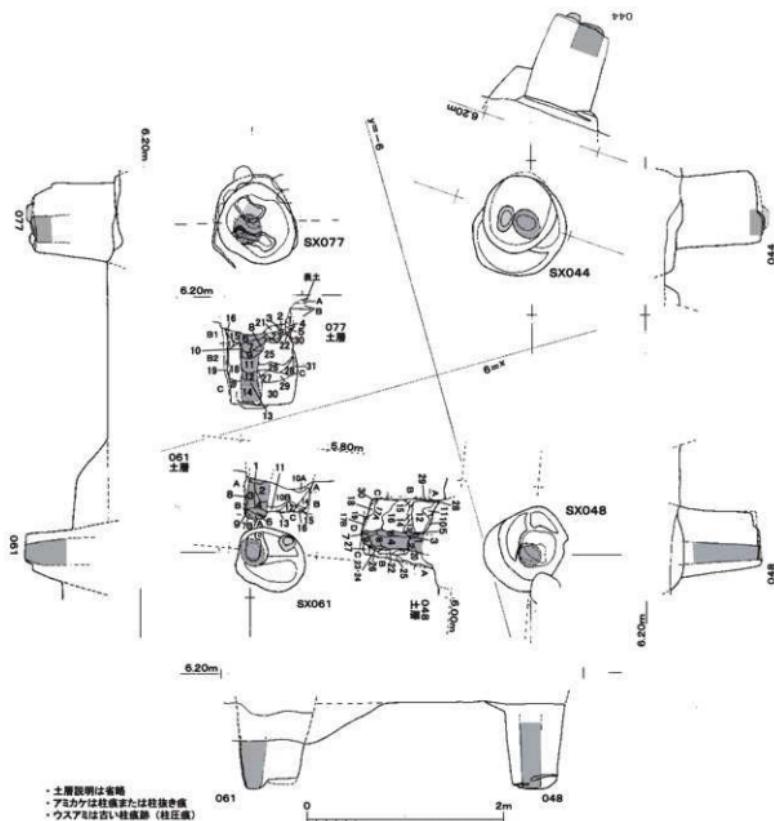


Fig. 29 SB01実測図・柱穴土層図 (1/50)

期不明瞭だが、住居形式から弥生終末期～古墳前期か。

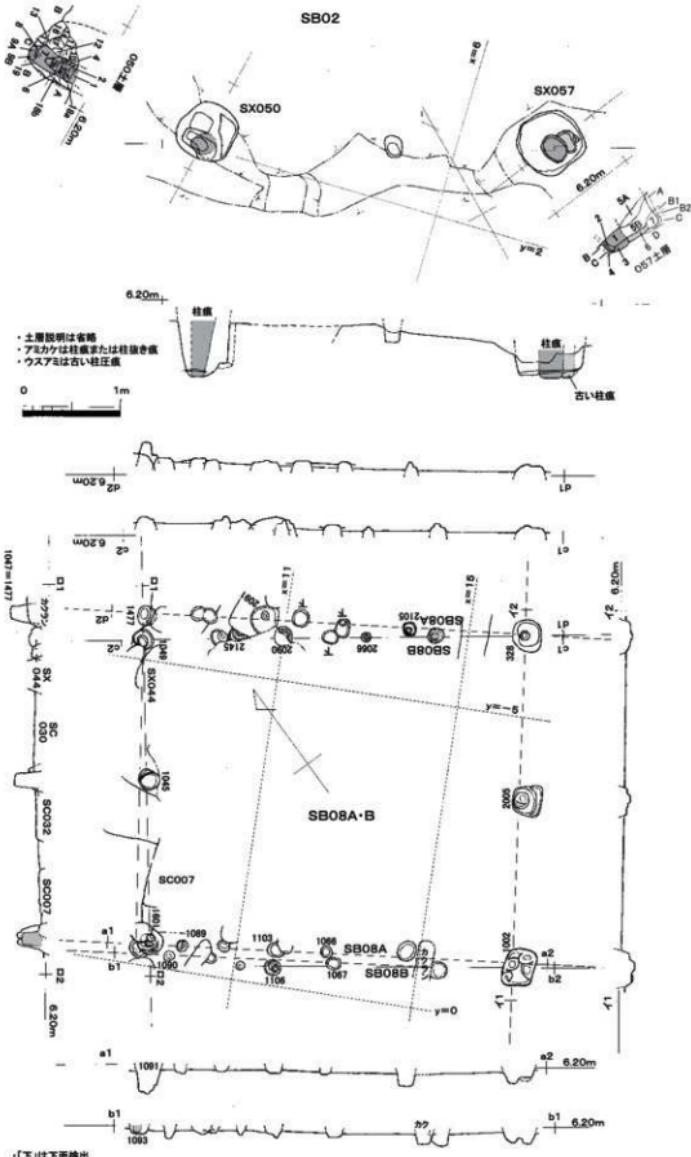
- SC008A～E (Fig. 35 上) I区南西部東から一部II区南縁にまたがる。複数の時期や異なるプランの一群を「SC008」としたが (SC008A～E)、連続的な建替えの痕跡か。SC005、SC053、SC007、SC006=302に切られ、SC391にも切られている蓋然性が高い。一部不明確な切り合いもあるが、008Ca～Cc (この前後は不明) →008A→008E→008D→008B の変遷がもっとも矛盾がない。ただし008Bのみ他とは異なりやや新しい可能性も残る。SC008Aは西辺の壁周溝や壁が僅かに残るが、若干湾曲する「小判形」住居。2.95m前後×1.3m以上、N-31.5° (20°~37°) -W。SC008Bは1.6~1.65m×2.7m、N-1° -E。SC008Cは西辺のごく一部のみ検出で規模不明、008CaはN-16.5° -W、008CbはN-18.5° -W、008CcはN-7° -W。SC008Dは東辺が2箇所候補があり、008D $\alpha$ は2.5m×3.4m、008D $\beta$ は2.5m×2.45mで、方位はN-3°~7° -W。SC008Eは008Dに切られ南辺が不明確だが、2.5m前後×3.15m×、N-10°~14° -W。いずれも主柱穴はない。出土遺物に乏しく明確な時期は不明だが、全て略方形（長方形）竪穴であり、推定小判形の008Aは弥生後期初頭～前半前後、他も弥生後期後半までの幅内である可能性が高い。いずれ

も弥生後期だ  
ろう。

- ・**SC053** (Fig. 35  
上) I 区南東  
中央東縁で検出。  
SC007 に切られ、  
SC008A を切る。  
0.7m 以上 ×  
1.3m 以上、  
N-11°-W。出土  
遺物に乏しいが、  
重複関係から  
**弥生後期後半**  
～**終末期**だろ  
う。**SC030** と同  
一か（前述）。

・**SC055** (Fig. 35  
下) I区南西  
部、一部 **SC007**  
**下部** (Fig. 16)  
からその西側に  
かけて壁周溝と  
壁際ピット列の  
遺存を検出した。  
0.7m 以上 ×  
2.5m 以上、  
 $N-17.5^{\circ}-W$ 。時  
期は SC007 以前  
としか言えない  
が、「小判形」の  
可能性があり  
**弥生後期初頭**  
～前半か

- SC098 (=102)  
(Fig. 36 上, PL.  
3-4, 4-3) I  
区北辺西側で検  
出。SC067, SK068  
に切られる不整  
円形住居。2, 2m



E=30, SR03 (1/40), SR08A+B (1/80) 實測圖

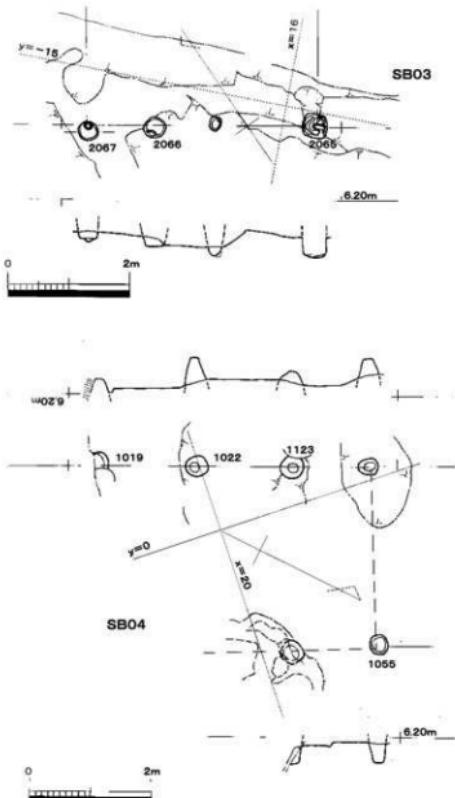


Fig. 31 SB03, SB04実測図 (1/80)

(Fig. 43-3)。弥生中期前半までのものか。SC022は、SX021の南側にあった推定方形堅穴の貼床痕跡。須玖I式土器片が出土 (Fig. 38-23・24)。

## (2) 井戸 (SE)

• **SE025** (Fig. 25, PL. 4-5~7、巻頭図版4-14) I区中央北西で検出。SX021を切る。上面径110×94cm、深さ105cmの遺存。八女粘土の途中まで掘削し、湧水が今もある。土層観察と平面検出から井戸側があつた可能性が高いが、木質は残らない。出土土器は井戸としては非常に少ないが、わずかに古式土器片がある (Fig. 38-25)。精製長頸壺の頸部～口縁部が内湾化し、**III A期古相**に下るか。

## (3) 土坑 (SK・SX) (Fig. 26-27)

• **SK355** (Fig. 26 左上、PL. 7-3) 90×80 cmのまるま状不整円形土坑。N-42°-E。遺存は浅いが、南東側がやや深く10cm。検出時上層出土の**加耶系陶質土器短頸壺**口縁部がある (Fig. 40-1)。**金官加耶IV段階** (中敬澈2000)、おそらく**III A期新相**に併行するもの。検出時出土で遺構の時期はより古いが、周囲遺構より新しく古墳前期の土坑か。

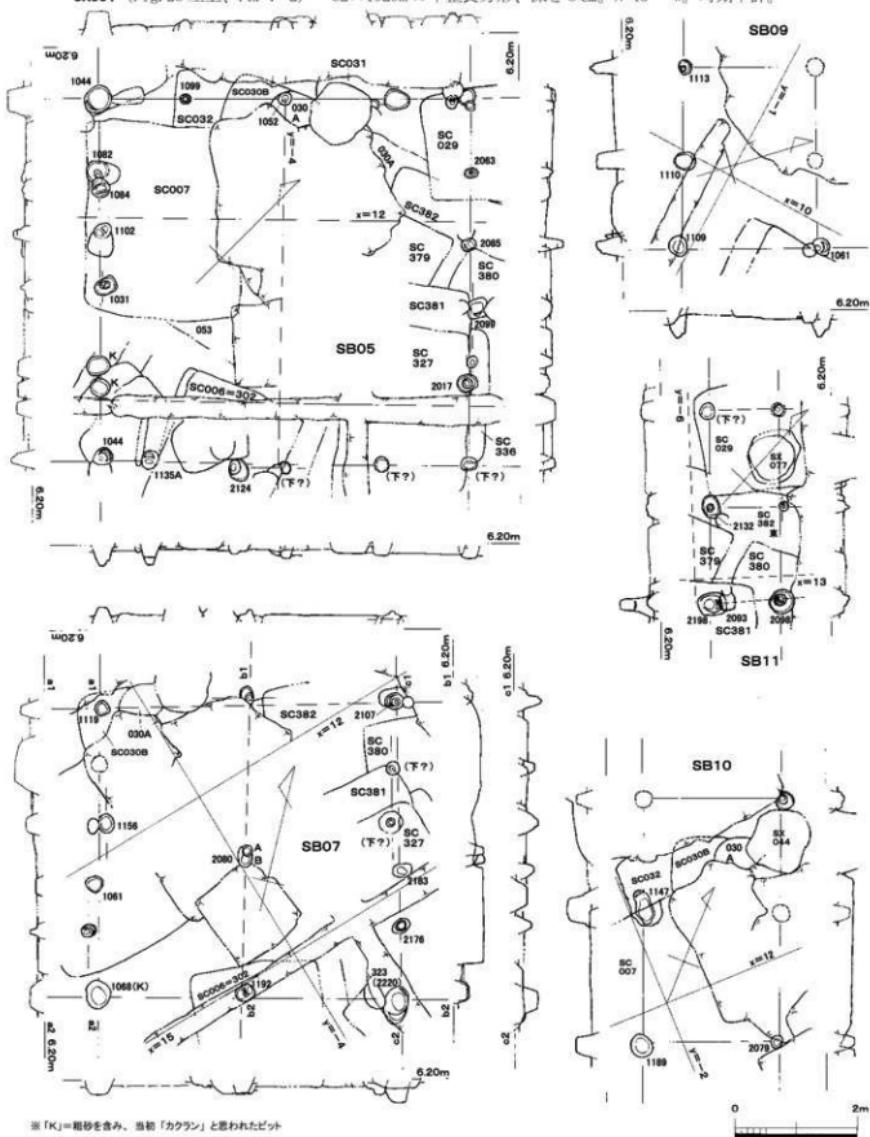
×2.0m以上。ただし検出面直下で炉址のある床面で、この平面プランは掘方の検出であり実際は一回り大きい可能性がある。炉址は中央から北西側に偏る。主柱穴は無しか? 現状の長軸はN-13° 前後-W。出土遺物に乏しいが、形式から**弥生中期**だろう。

• **SC071** (Fig. 36 下) I区西北部で検出。円形ないし「小判形」住居。床面下に貼床の掘方凹みがある。一部の遺存で円形の場合の径は不明確だが、現状で1.8m(以上)×0.9m以上、おそらく円形なら径3m前後。小判形の場合は本来の規模は不明。時期も出土遺物に乏しく不明確。

• **SC073** (Fig. 36 下) I区西北部、SC071に切られる。1.8m以上×1.2m以上の小判形ないし不整椭円形、N-26° 前後-E。出土遺物に乏しく時期不明だが**弥生中期**か。

他に、SC004、SC022、SC032、SC030B、SC031、SC099、SC0701、SC0702、SC015、SC(?)054のほか、二本主柱の痕跡とみられるSP1197-1199 (PL. 4-4) がある (N-39°-E)。合計39棟(基)以上である(推定建替で同じ遺構番号を振っているものがあるため)。SC004は、SC005の西側の擾乱の間にあった貼床もある堅穴覆土だが (SX015、SC005西に切られる)、平面プランが隅角以外全く不明である。ただし、木製剣の把頭飾の下部固定具らしき石器が出土している

- ・SK386 (Fig. 26 左上) 38×58 cm の不整長方形、深さ 8 cm。N-12° -E。出土遺物少なく、時期不詳。
  - ・SK351 (Fig. 26 左上、PL. 7-2) 62×102 cm の不整長方形、深さ 8 cm。N-43° -W。時期不詳。



\*「K」=粗砂を含み、当初「カクラン」と思われたピット

Fig. 32 SB05・07・09～11実測図 (1/80)

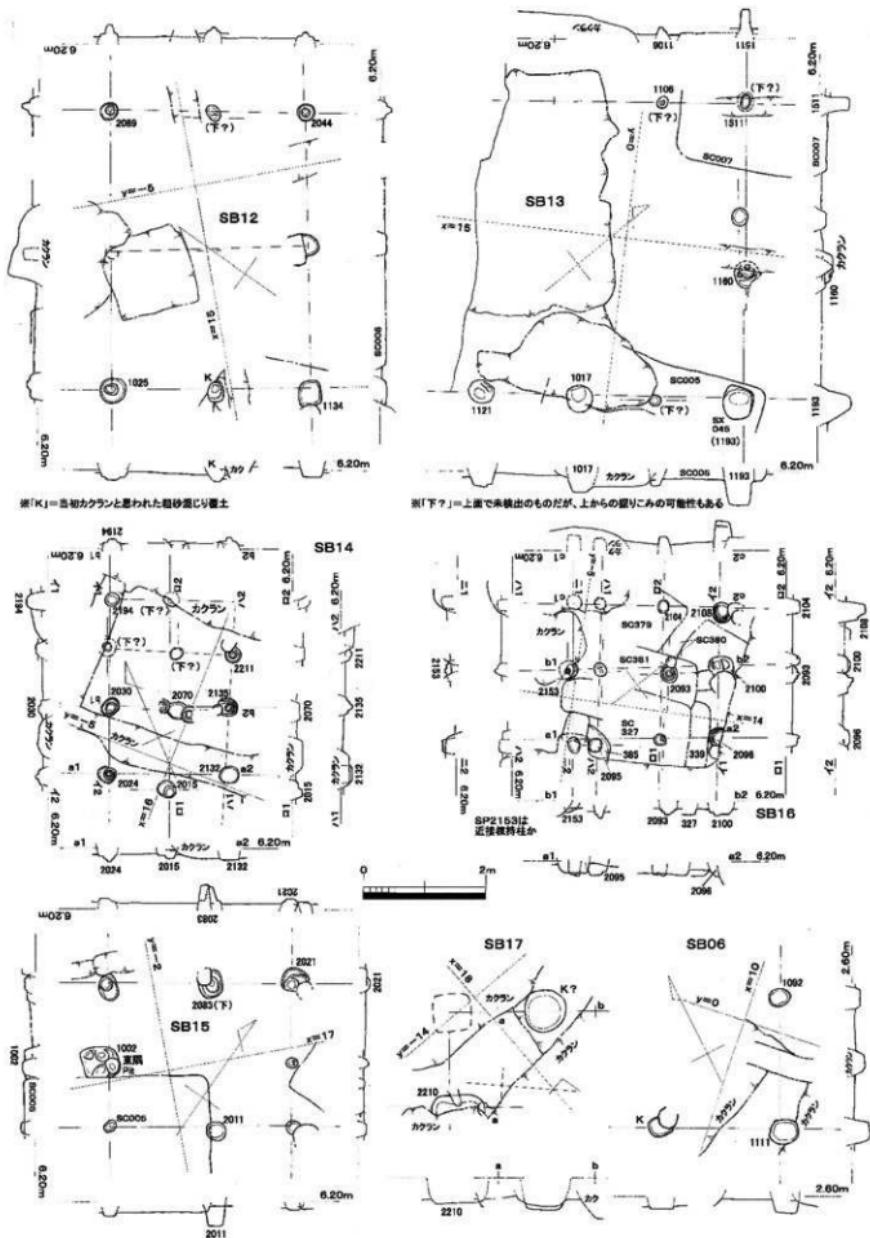


Fig. 33 SB06・12～17実測図 (1/80)

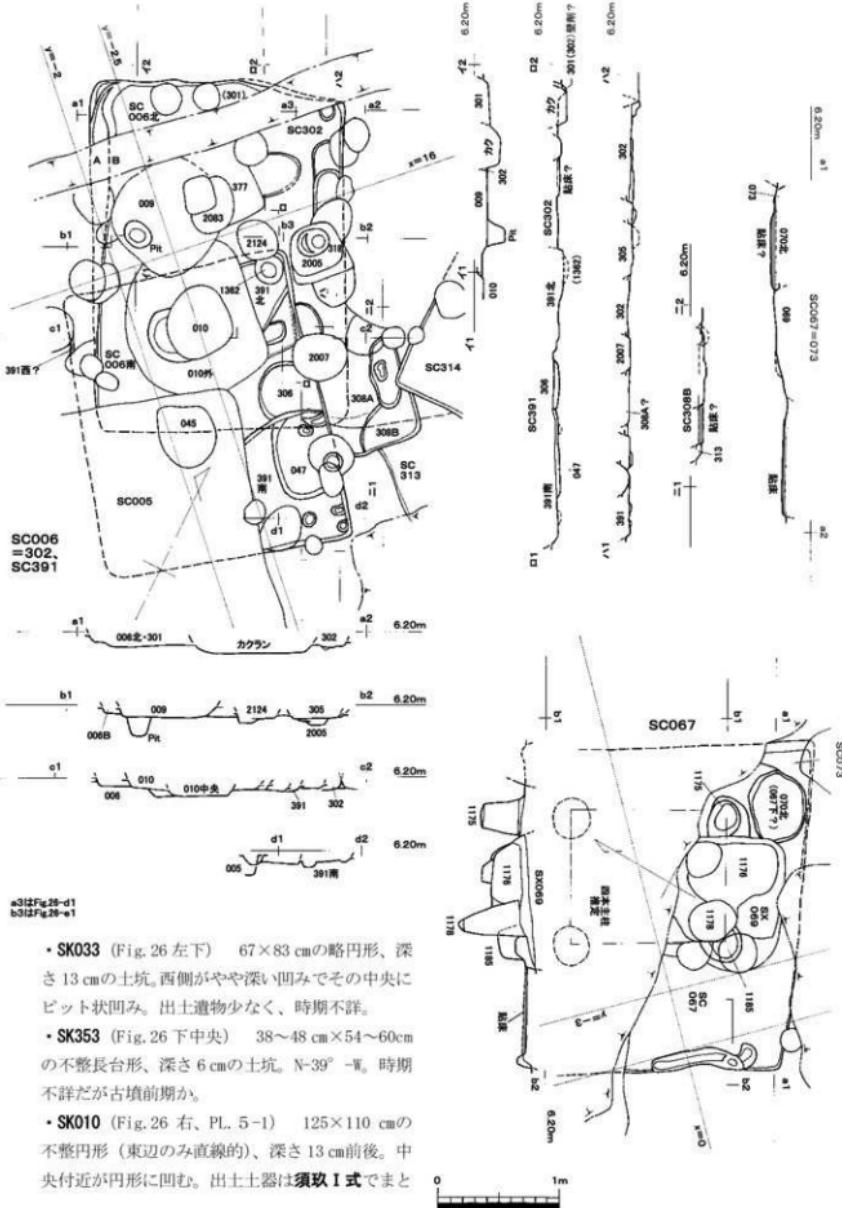


Fig. 34 SC006=302・SC391、SC067=073実測図 (1/40)

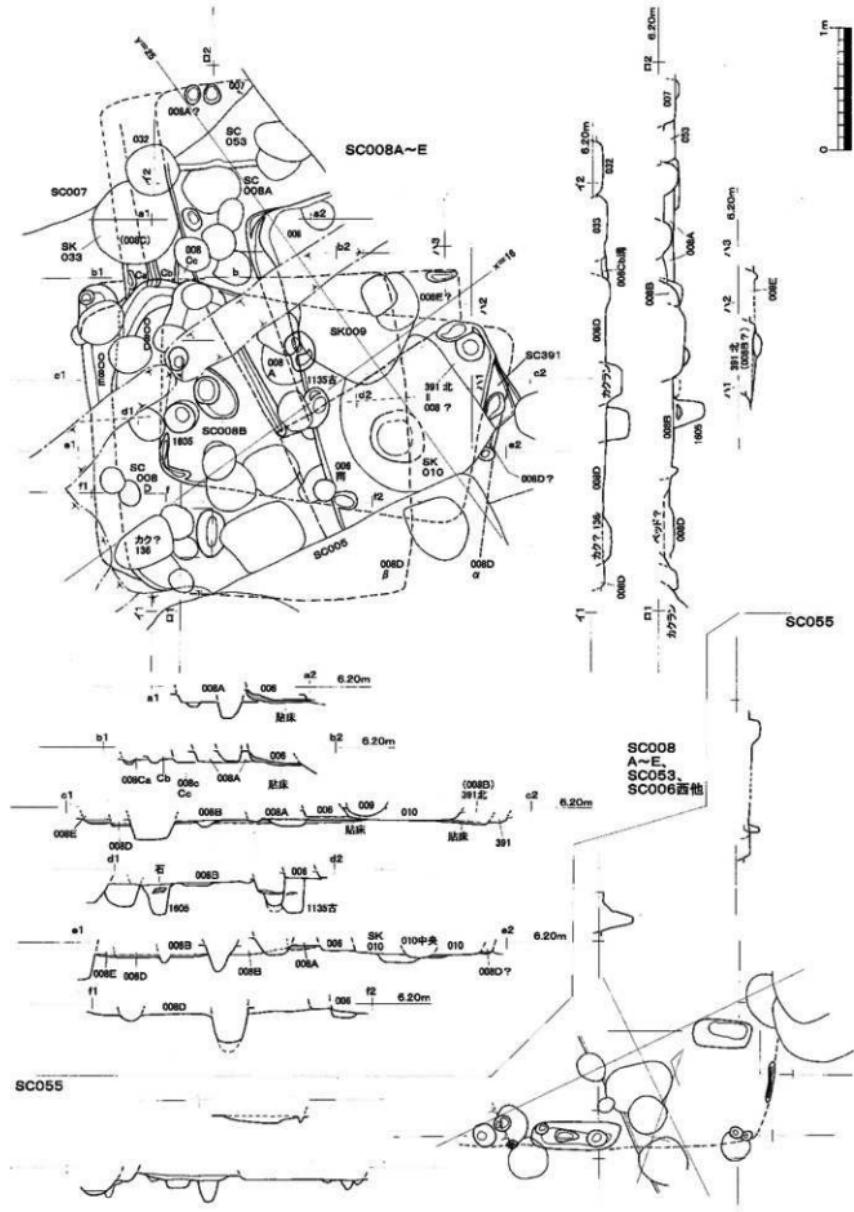


Fig. 35 SC008A ~ E・SC053・SC006西半、SC055実測図 (1/40)

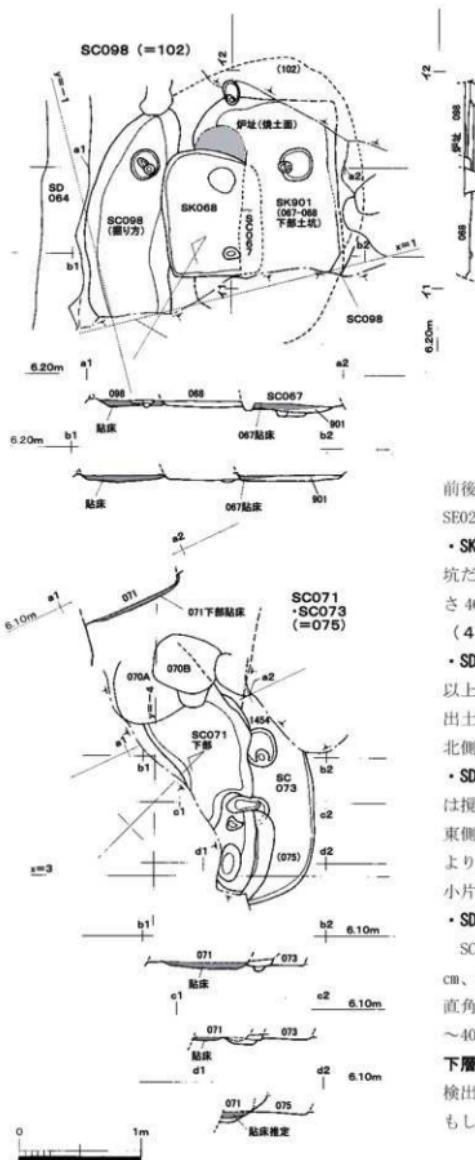


Fig. 36 SC098・SC067・SK901、SC073=075・SC071（下部）

実測図（1/40）

まる（Fig. 38-11～13）。多くの遺構に切られ、時期的に矛盾はない。

・SK009 (Fig. 26 右、PL. 5-1) SK010を切る、70～96 cm×84 cmの不整台形状。深さ 8 cmの遺存。出土遺物に乏しく時期不詳。

・SX (SK) 026・027 (Fig. 27 左、PL. 5-3・4) 140 cm以上×180 cm以上の不整円形竪穴状。「027」は深さ 12 cm、中央西側の不正形凹み「026」は深さ 24 cm、その東側の SP091 は深さ 50 cm。026 の長軸は N=33° -E。SC023 を切る。出土遺物は弥生中期土器が多いが、わずかに須恵器坏蓋があり（Fig. 38-19～22）、後者の時期なら古墳後期中頃（TK10～MT85）。

・SX021 (Fig. 27 右、PL. 4-7) 1.45m 前後×1.55m 前後の不整隅丸方形。N=32.5° -W。SE025 に切られる。遺物が少なく時期不明。

・SK069 (Fig. 10-27 下) SC067 を切る方形土坑だが複数柱穴が重複する。74～80×80 cm、深さ 46 cm、N=20° -W。古墳前期以降か。

#### (4) 溝状遺構 (SD) (Fig. 8-9-13-28)

・SD064 (Fig. 28、巻頭図版 4-19) 延長 2 m 以上、幅 28～36 cm、深さ 15 cm、N=27.5° -E。出土遺物は少ないが、弥生中期土器片が伴うか。北側比高 100 次では延長は未確認。

・SD001 (Fig. 8) I 区 SC007 を切る溝。東側は擾乱に切られ、延長 1.7 m。幅は西側 30 cm、東側 20 cm、深さは 2～6 cm の遺存。底面は西側より東側が 5 cm 低くなる。N=41.5° -E。須恵器小片があり、暗褐色覆土で古墳後期か。

#### ・SD002・011・SX035 (Fig. 7-13-15)

SC005 を切る。SD002 は延長 1.6 m、幅 28～44 cm、深さ 15～25 cm の遺存、N=36° -E。それが直角に屈曲して続く SD011 は長さ 1.2 m、幅 30～40 cm、深さ 20 cm 前後、N=40° -W。SD002・011 下層～底面覆土は小砂利（粗砂）であり、上面検出が困難であったこともあり、暗渠状施設かもしだれない。SD011 は南側で緩やかに東へ屈曲

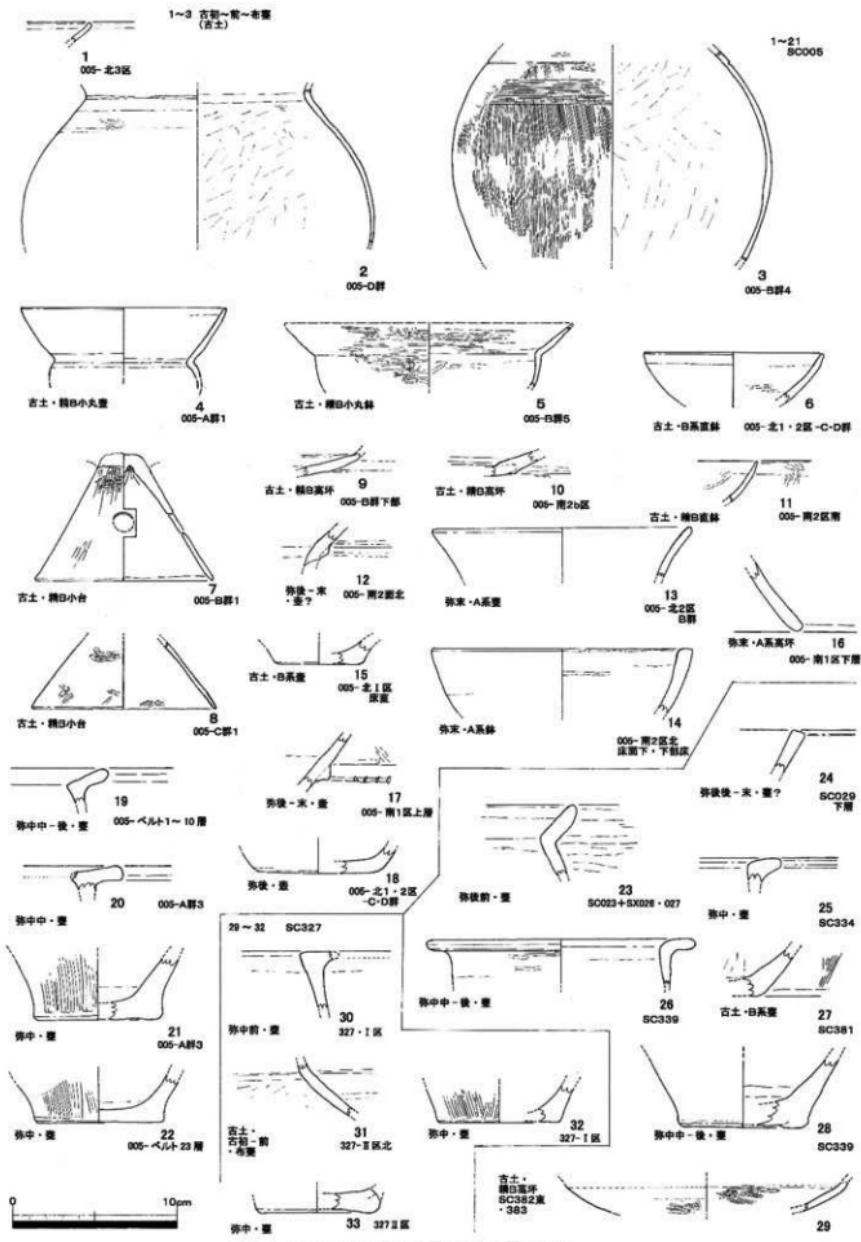


Fig. 37 SC (竪穴住居) 出土土器 (1/3)

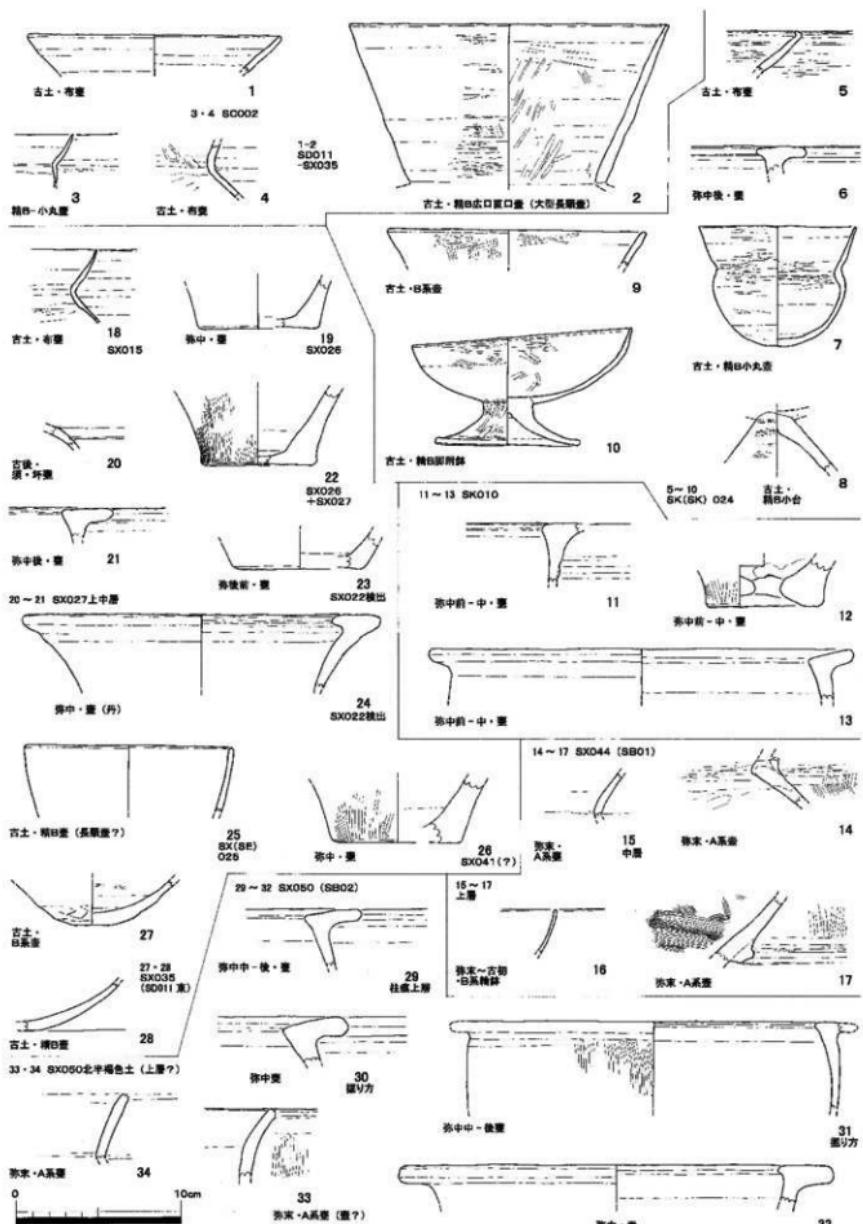


Fig. 38 SD (溝)、SK・SX (土坑、大型柱穴、井戸、その他遺構) 出土土器 (1/3)

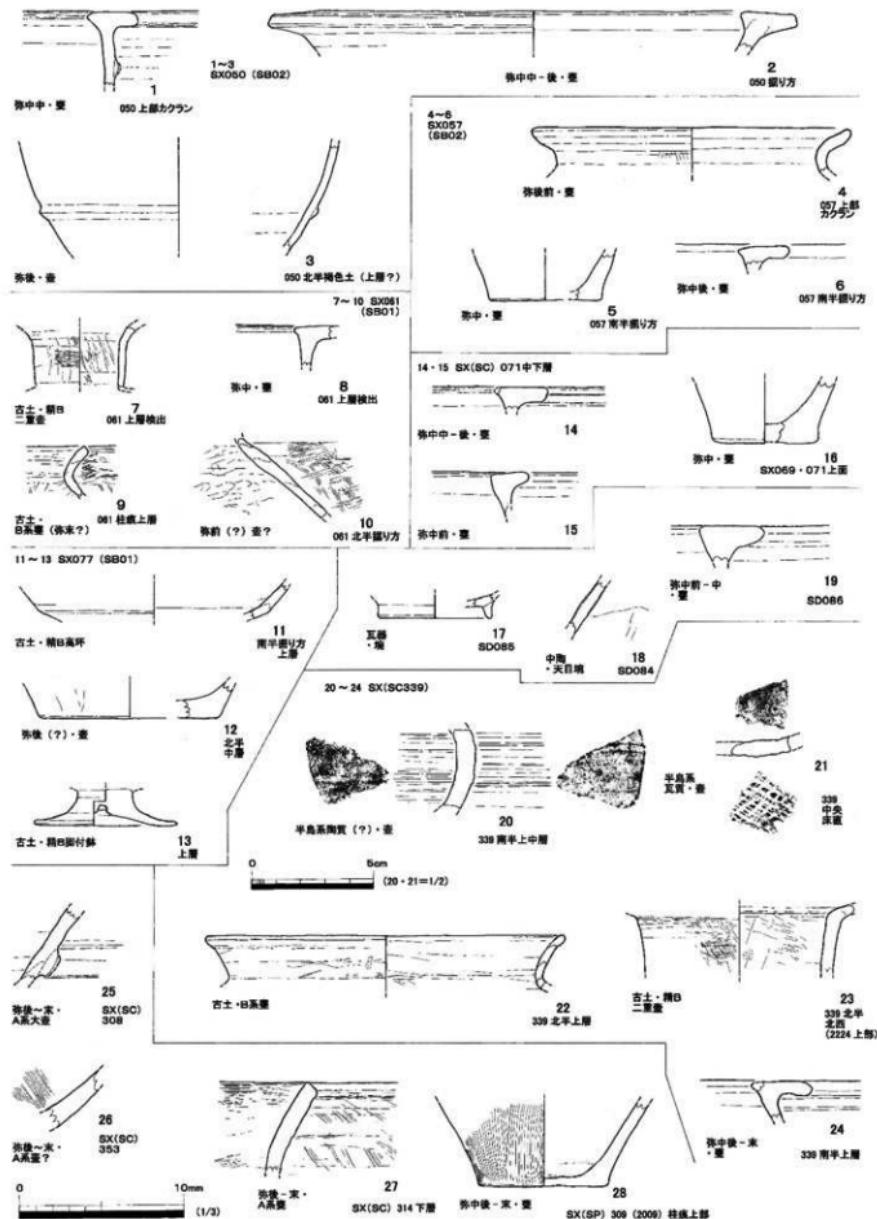


Fig. 39 SX (土坑、大型柱穴、竪穴遺構、その他)、SD (溝) 出土土器 (1/3、一部1/2)

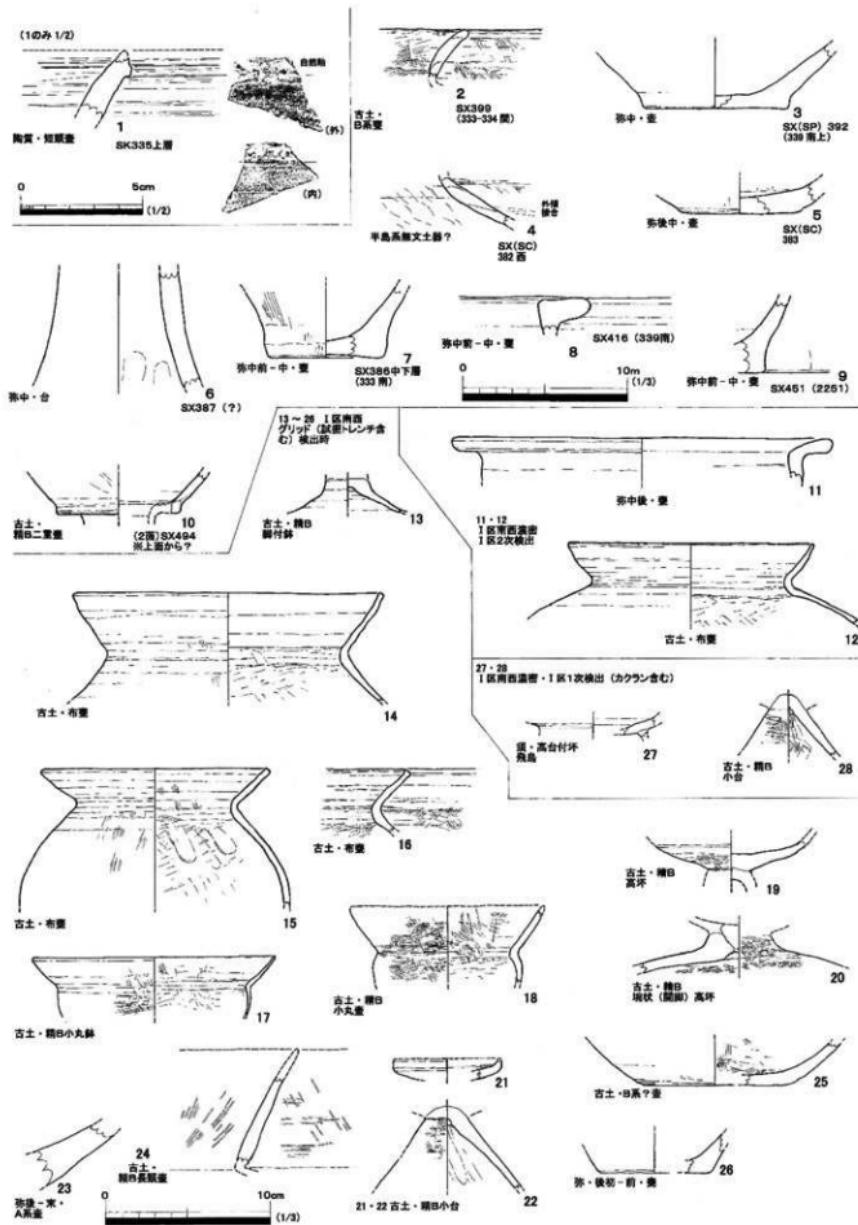


Fig. 40 SX (土坑、大型柱穴、堅穴、その他遺構)、グリッド別包含層検出時出土土器 (1/3、一部1/2)

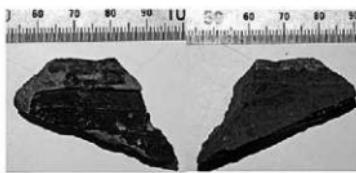
50 60 70 80 90 50 60 70 80 90 | U | 60 70 80 90 U 60 70 80 90



Ph.1-1 陶質土器？壺胴部片 (Fig.38-20)



Ph.1-2 瓦質土器壺底部片 (Fig.38-21)



Ph.1-3 陶質土器壺口縁部片 (Fig.39-1)

SD085・086、SD084 (Fig. 9, Pl. 3-1) 085・086 は調査区北辺の近代以降の掘りこみ下部で検出された、溝の最下部。085 が新しい。図示した遺物 (Fig. 39-17-19) は遺構の時期より古いもので、近世（以降）の陶磁器が含まれる。084 は 085・086 より北東側で検出された溝の最下部。中国陶器の点目茶碗破片 (Fig. 39-18) があるが、近世陶磁器もあったため、近世以降の溝。SD085・086 に前後する。いずれも近世以降近代までの用水路だろう。

SX (SD) 035 に移行する。035 最下層は必ずしも粗砂は含まれない。035 は擾乱に切られる直前で SD011 と同じ方向に屈曲する。底面の標高は SD002 から SX035 にかけて 8 cm 深くなる。これらの一連の溝は SC003 を中心可能性がある。出土土器は主に II C 期だが (Fig. 38-1~4-27・28)、口縁部が立ち上がる布留系壺 (Fig. 38-3) や上層出土の精製直口壺（長頸壺大型品；Fig. 38-4）の厚みなどから一部 III A 期古相に下る可能性がある。SC005 廃棄直後と同一様式期の掘削で、廃絶時期は SC003 と同じとなる。

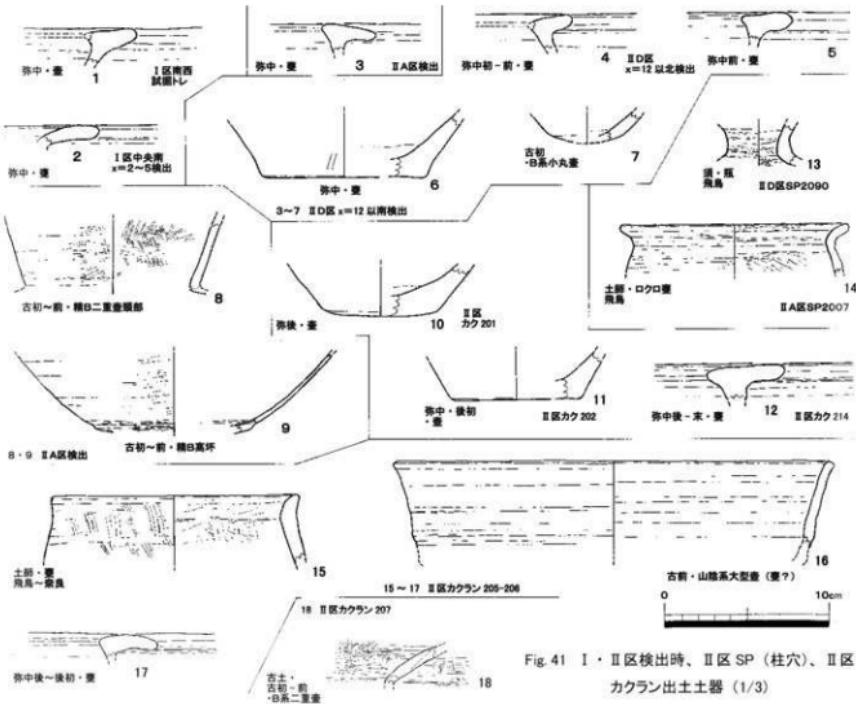


Fig. 41 I・II区検出時、II区 SP (柱穴)、II区カクラン出土土器 (1/3)

### (5) 捜立柱建物 (SB)、柵列区画 (SA) (Fig. 29~35)

掘立柱建物の復元は調査中できたものと整理時に図上で行ったものがある。ただし後者も「柱筋」は調査時に認識していたものが多い。また後者は単に柱筋だけでなく、底面の深さや覆土の特徴(ほぼ全ての柱穴でメモを記録)、重複関係で矛盾が少ないよう復元推定している。しかし一部は、「下面」から検出したピットが伴うものと判断せざるを得ないものもあった。

- SB01 (Fig. 29、表表紙写真、PL. 1-2・6) I 区中央南と一部 II 区北西にかけて検出。1 × 1 間、 $3.45 \times 2.87\text{m}$ 、N- $28^\circ$ -W。柱穴は、最初に「井戸」と認めて掘削した SX044 以外は半裁して土層を観察した(卷頭図版 4-15~17)。また掘削途中で太い柱痕ないし底面柱圧痕が検出され(PL. -5~8)、後者は各 2 箇所確認できたので、少なくとも一度建替があったと推定できる。各柱穴は径 70~90 cm の不整円形だが、残りの悪い SX048 以外は上面で径 100 cm 前後の浅い凹みが残り、本来「段掘り」だったことが分かる。柱間が広く、柱穴が深い特徴などは、「高層建物(物見櫓)領域」との指摘がある(三好千絵 2015)。物見櫓など樓觀的建築を想定する。柱穴出土遺物は、SX044 からは弥生終末～古墳初頭の土器片 (Fig. 38-14~17)、SX061

からは弥生前期・中期土器以外に古式土器があり (Fig. 39-7~10)、SX077 も上層だが掘り方中に古式土器を含む (Fig. 39-11~13)。II 期(古墳前期前半)頃の建築・廃棄を考える。

- SB02 (Fig. 30 上、卷頭図版 2-3 左) 2 × ? 間、 $2.95\text{m} \times ?\text{m}$ 、N- $60^\circ$ -W (直角 N- $30^\circ$ -E)。2 間としたが中間は東柱状小柱穴で「1 間」とすべきか。調査区外西側に展開すると考える。柱穴が削平されるが、本来はかなり深い。太い柱痕跡が土層と底面圧痕から各 2 箇所あり(卷頭図版 4-18、PL. 6-1~3)、建替が考えられる。SB01 と同じ物見櫓・樓觀状建築と考える。出土遺物は、SX050 からは須恵 I 式新相(～II 式古相)の主体とした土器片 (Fig. 38-29~32, 39-1~2) があり、弥生後期～終末の土器は全て上部別遣構や撹乱の可能性がある覆土上層からの出土 (Fig. 38-33~34, 39-3)

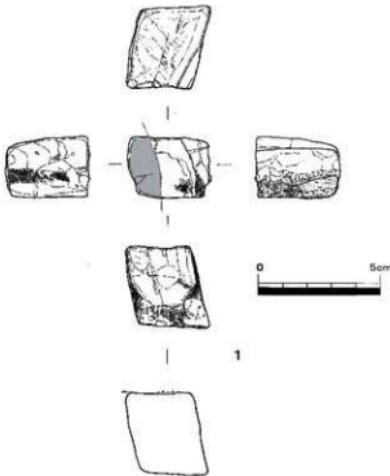


Fig. 42 I 区 SP1167 柱痕下層出土鉢型片 (1/2)

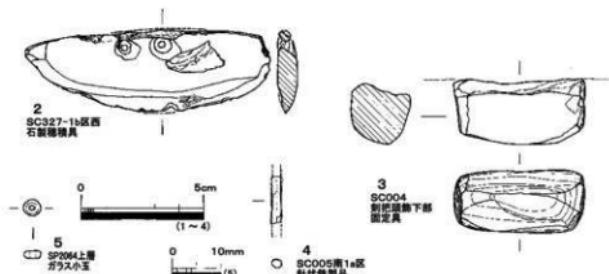


Fig. 43 比恵139次出土石器・鉄器 (1/2)、ガラス小玉 (1/1) 実測図

であり、**SB057** 出土土器 (Fig. 39-4~6) も確実に伴うのは**弥生中期土器**であり、建替は**弥生中期中頃～後葉**と考えられる。

・**SB08** (Fig. 30 下) 建替があり、**SB08B→SB08A**。**SB08A** は 2 × 6 間、 $5.4 \times 6.0 \sim 6.2m$ 、N-40° - W。**SB08B** は 2 × 5 / 6 間、 $5.1 \sim 5.5 \times 6.5m$ 、N-51°~55° - W (N-35°~39° - E)。さらに西邊に「**SB08C**」列もある可能性がある。平地建物=平地住居形式だろう。SC007、SC327 を切り、SC005 に切られ、SB005 にも切られている可能性が高い。**古墳前期前半の II B 期前後**となるか。

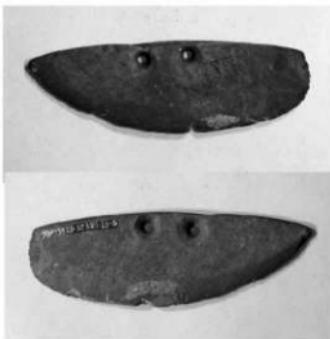
・**SB03** (Fig. 31 上) II 区東方で検出。かなり削平された場所だが柱穴が残る。2 × ? 間、 $2.95 \times ? m$ 、N-60° - W (N-30° - E)。東側に展開すると考える。柱穴は極暗褐色覆土。古墳前期以前。

・**SB04** (Fig. 31 下) I 区南東部南で検出。SC005 に切られ、SC003 下部検出の柱穴を含む。1 × 3 間、 $1.49 \times 2.3m$ 、N-64°~65° - W (N-25°~26° - E)。SC376、SC006 の方位に近い。

・**SB05** (Fig. 32 左上) 4 / 5 × 5 間、 $6.0 \sim 6.1 \times 5.9m$ 、N-44°~45° - E (N-45° - W)。平地住居形式。東隅角の柱穴は下部検出だが、ちょうど測量杭があり土柱を残しており、上部検出を見逃したと考える。SC007、SC327 を切り、SB08 も切るか。SC003 に近い方位で、**II C 期～III A 期古相**だろう。

・**SB07** (Fig. 32 左下) 2 × 5 間、 $4.9 \sim 4.95 \times 4.7 \sim 4.9m$ 、N-13°~13.5° - W。平地住居形式。中央に屋内棟持柱があるが (SP2080)、**SC030A=053** と共有する。SC030A=053 の建替え。東辺の柱穴は SC327 下部検出。西辺柱穴の一部は SC007 との新旧が微妙だが、SC007 下部検出を含み、**弥生後期後半前後**と考える。

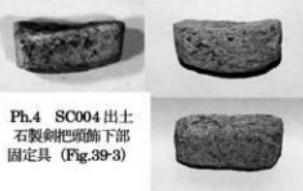
**SB09** (Fig. 32 右上) は 1 × 2 間、 $2.25 \times 2.95m$ 、N-72.5° - W (N-17.5° - E)。**SC055** と同方位で重複関係があるが前後不明。**SB11** (Fig. 32 右中) は 1 間以上 × 2 間、 $2.0 \sim 2.15$  (以上) × 3.1m、N-44° - W。東にもう 1 間延びて**小型総柱建物**(高床倉庫)となるか。SC029、SC381 を切り、SC327、SC339、SB04、SC003 の方位に近い。**II A～II B 期または III A 期古相**か。**SB10** (Fig. 32 右下) は 1 × 2 間、 $2.32 \times 3.92m$ 、N-23.5° - W。やや小型の**高床倉庫**か。SC007 に切られ、SC030A=053 や SC318 などの方位に近い。**弥生後期後半～終末期**か。**SB12** (Fig. 33 左上) は 2 × 2 間、 $3.24 \times 3.3m$ 、N-57° - E (N-33° - W)。平地建物か。SC007、SC327、SC337 を切り、SB08 に切られる。重複関係から II B 期の幅内の可能性が高い。**SB13** (Fig. 33 右上) は 2 / 3 × 3 間、 $4.85 \times 4.4m$ 、N-42° - W。平地住居形式。SC005 を切り、SC003 と同方位で、同時存在か。**古墳前期の III A 期古相**の可能性。北隅角柱穴は SD001 の下部で SC007 との関係は問題ない。**SB14** (Fig. 33 左中) は 2 × 3 間、 $1.96 \sim 2.05 \times 2.86m$ 、N-46°~47° - W (N-43°~44° - E)。総柱タイプ**小型高床倉庫**。西辺梁間中央は**近接棟持柱** (対称なら東側桁行は 1 間延びる可能性)。SC327、SC337 を切る可能性が高い。下面検出の柱穴は上面での検出漏れだろう。方位と重複関係から SC003、SB13 と同時期 (**III A 期古相**) か。**SB15** (Fig. 33 左下) は 2 × 2 間、 $2.35 \sim 2.4 \times 3.0 \sim 3.1m$ 、N-54° - E (N-36° - W)。SC005 (方位は近い)、SB19 に切られる。SB08 南隅角柱穴 (SP1002) 下部の古い柱を含み、SB08 にも切られる。SC382a=383、SC391 などにも方位が近い。**弥生後期後半～終末期**か?。**SB16** (Fig. 33



Ph.2 SC327 出土石包丁 (Fig.39-2)



Ph.3 SP1167 出土石製鋳型片 (?) (Fig.38-1)



Ph.4 SC004 出土  
石製剣把頭飾下部  
固定具 (Fig.39-3)

右中)は $2 \times 2$ 間の**總柱小型高床倉庫**の西辺に狭い**1間の庇または縁が付設**する。總柱部分が $2.1 \sim 2.3 \times 2.0\text{m}$ 前後、全体で $2.1 \sim 2.3 \times 2.4 \sim 2.5\text{m}$ 、N=39° -E。SC381、SC379、SC380を切るがSC327との重複は微妙。古墳後期の可能性もあるが不明確。**SB17** (Fig. 33下中)は、II区東端の搅乱の間で検出。かなり削平された箇所だが怪ないし一辺 $70 \sim 90\text{cm}$ の柱穴が残り、柱間 $150 \sim 160\text{cm}$ の**大型建物**の一部か。**SP2210**が略方形のため、この西側に隅角柱穴を想定すると、N=4° -W前後で正方位に近い。暗褐色気味覆土で、**飛鳥時代**か。**SA01**と同方位で、同時期か。**SB18** (Fig. 33右下)は $1 \times 1$ 間、 $2.0 \times 2.15\text{m}$ 、N=26° -E。SC007、SB08を切る。古墳後期の可能性。**SB19**と**SB20** (Fig. 44上)は2柱穴を共有し、同方位の建替。**SB20→SB19**、**SB20**西隅角柱穴は**SP2002 下部柱穴**でSB08以前。**SB20**は $1 \times 1$ 間、 $2.36 \times 4.28\text{m}$ 、**SB19**は $2 \times 2$ 間、 $3.46 \times 3.76\text{m}$ 、いずれもN=69° -W (N=21° -E)。東隅角**SP2009A**の柱抜跡から**須玖 II式壺**の大きな破片が出土 (Fig. 39-28)。建物時期を示す。**柵列 SA01** (Fig. 44下)は調査区中央から北西で検出。 $4.52\text{m} \times 10.64\text{m}$ 、N=88° -W (N=2° -E)でほぼ正方位。**飛鳥時代**か。北辺はさらに東の**SP1499**まで延びる可能性 (Fig. 9)。柱穴は全て深い。**SA02** (Fig. 7)はII区東半中央搅乱部分に遺存した2間の柱列。全長 $1.1\text{m}$ 、N=20° -E。弥生中期か。

<文献>久住猛雄 1999「庄内式併行期における北部九州の土器様相」『庄内式土器研究』IX／久住猛雄 2017「福岡県(糸島・早良・福岡平野)『九州島の古式土器』第19回九州前方後円墳研究会(長崎大会)発表要旨集・基本資料集』/中敬做 2000「金官加耶土器の編年-洛東江下流域 前期陶質土器の編年」『伽倻考古学論叢』3、駕洛國史蹟開發研究所、韓國ノ三好千絵 2015「北部九州の弥生時代鼎立柱建物-柱穴の計測値による検討-」『古文化叢叢』第74集、九州古文化研究会

### 3. 出土遺物

#### (1) 出土土器 (Fig. 37~41)

遺構の事実報告に力を入れたため、説明する紙幅が尽きた。挿図中に、各遺物の出土遺構・層位と最低限の説明を略記して入れている(以下凡例参照)。なお一部は検出遺構の項で説明している。

<凡例>「**弥**」=弥生土器(弥生時代)、「**前**」=前期、「**中**」=中期、「**後**」=後期、「**末**」=終末期、「**初**」=初頭、「**古**」=古墳時代、「**飛鳥**」=飛鳥時代、「**土師**」=土師器。「**須**」=須恵器、「**A系**」=在来系、「**B系**」=伝統的V様式系(変容含む)(久住 1999・2017)。「**弥中**」=弥生中期、「**弥後**」=弥生後期、「**弥末**」=弥生終末期、「**中前**」=中期前半、「**中中**」=中期中頃、「**中後**」=中期後葉、「**中末**」=中期末、「**後初**」=後期初頭、「**後前**」=後期前葉、「**後中**」=後期中頃、「**後後**」=後期後葉、「**古初**」=古墳初頭(久住 2017 のII A期)、「**古前**」=古墳前期、「**古土**」=古式土師器、「**精B**」=精製器種B群、「**布**」=布留式系、「**直**」=直口、「**小丸**」=小型丸底、「**小台**」=小型器台、「**二重**」=二重口縁

#### (2) 石器・石製品 (Fig. 42・43, Ph. 2~4)

**2 (Fig. 43)**は凝灰岩ホルンフェルス製**石製穂摘具**(石包丁)である。剥離整形後、敲打・研磨を加え、外反両刃の杏仁形に仕上げる。背破損後も少し研磨を加え使用している。なお穿孔を表裏から行っており、中心間は $1.55\text{cm}$ を測ることから、弥生時代中期末～後期前半頃のものか。器長約 $3.45\text{cm}$ 、最大厚 $0.75\text{cm}$ 、重さ $34.9\text{g}$ を測る。**3**は砂岩製の**石製把頭飾下部固定具**か。粗削り加工により長方形に整形し、角など一部に研磨を加え、全体的に使用によると考えられる摩耗痕がみられる。下面(図では上面とした)に使用による摩耗痕が顕著にみられ、凹んでいることから、木剣・石剣などの把頭に使われている板を紐縛固定する土製把頭飾に近似し、石製把頭飾固定具の可能性があり、図化し紹介した。器長 $5.35\text{cm}$ 、幅 $2.65\text{cm}$ 、最大厚 $2.25\text{cm}$ 、重さ $45.6\text{g}$ を測る。石器には以上の他、**西北九州産出の黒曜石**を素材とした弥生時代前期(～中期初頭まで)と考えられる**打製石鎌未製品**や**石核・剥片・削片**がある。**SP1180**からは、西北九州産の漆黒黒曜石を素材とする大形削片の縁辺に主要剥離面から二次加工を加えた石器が出土している。器面の風化から先土器時代のものか。**1 (Fig. 42)**は石製鉄型の可能性がある石製品破片。石英長石斑岩製。推定

鋳型面にやや黒変化した部分があり、非常に浅いが鋳型の彫り込みが残る。黒変部の境界は彫り込みの段が一部しか残らない。一部の破断面を除き、複数の面で砥石などの二次的な利用がある。彫

り込み部は僅かな遺存であり、二次的に摩滅し小片のため不確実だが、**銅戈など**の武器形青銅器の刃部の鋳型だろう。器長(残存) 2.55 cm、残存幅 3.45 cm、器高(残存) 3.40 cm、重さ 39.8 g を測る。

(3) 鉄製品 鉄芯状鉄器が 1 点ある (Fig. 43-4)。断面略円形。器長 2.0 cm、径  $3.5 \times 4.0$  mm を測る。穿孔具ないし釣針の一部などか。SC005 出土。

(4) 玉類 ガラス小玉 (Fig. 43-5) が 1 点出土。淡青色透明。直径 3.35 mm、厚さ 1.8 mm、重さ 0.024 g。孔と平行な気泡の動きがある引き伸ばし技法の製作。並光 X 線分析から銅着色のカリガラスと判明し、着色剤に伴う元素の鉄、鉛も検出された。SP2064 上層出土。同ビットと周囲掘削土を水洗したが 1 点のみを検出した。(※「調査のまとめ」は巻末抄録「特記事項」を参照のこと。)

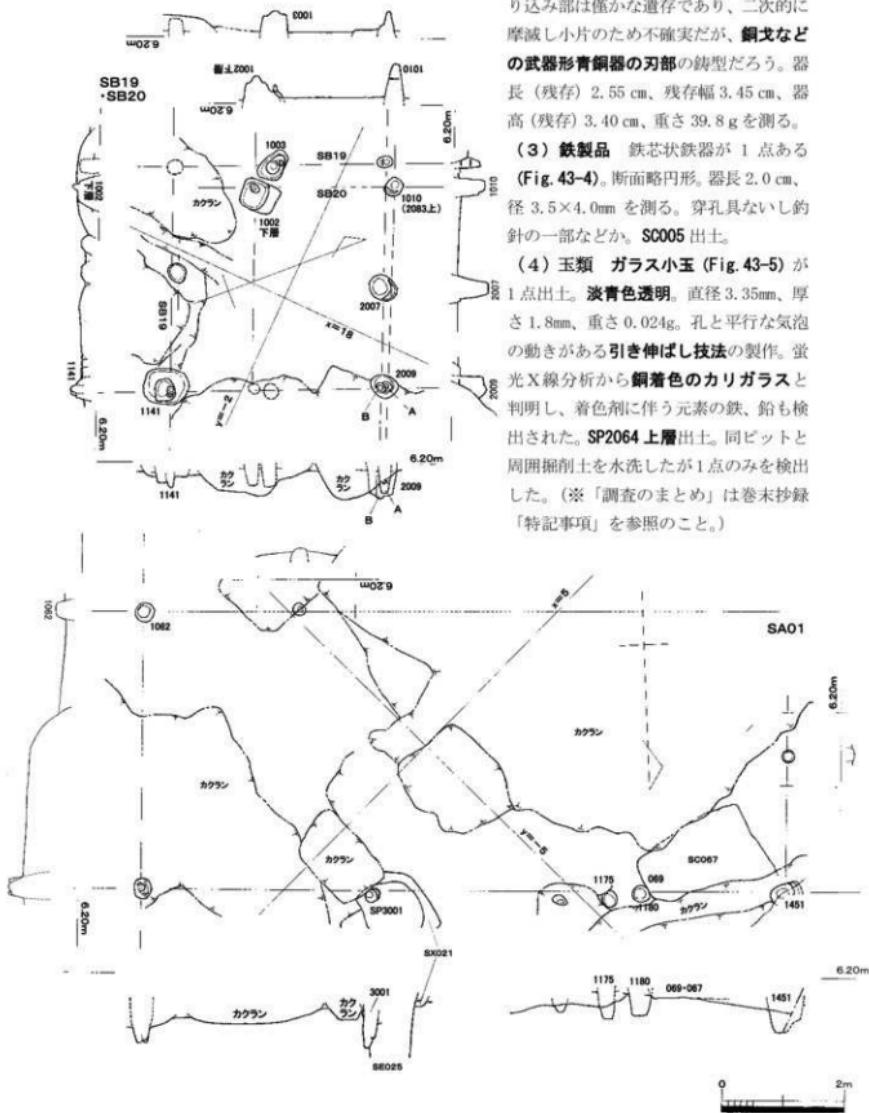


Fig. 44 SB19・20, SA01 実測図 (1/80)



1. I 区南西部調査状況（北西から）



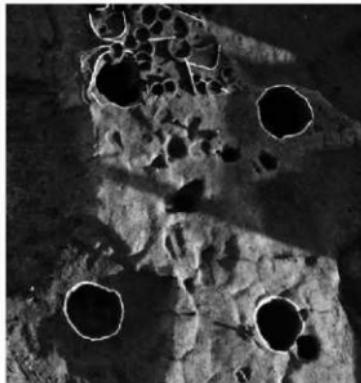
2. I 区 SB01, SE025 検出状況（南から）



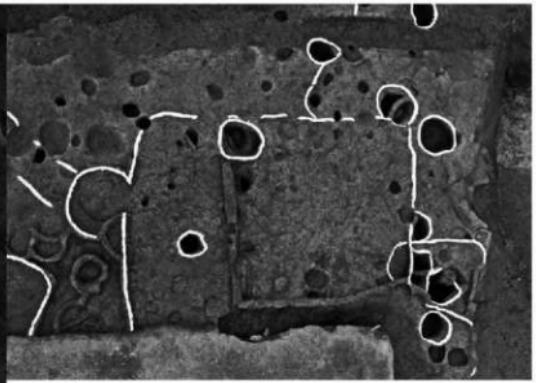
3. I 区 SC005 北半遺物出土状況（南東から）



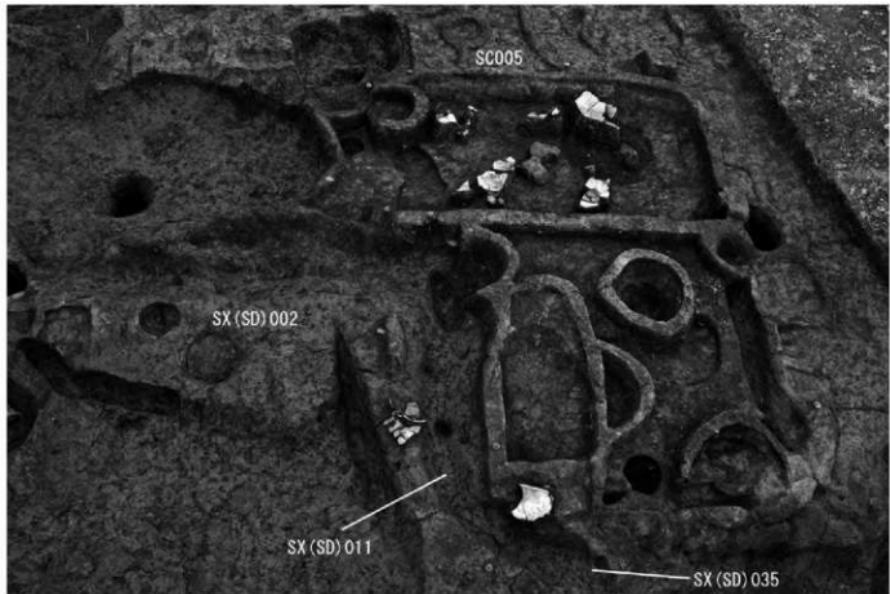
4. I 区 SC005 下部床面検出状況（南西から）



6. I 区 SB01 柱穴完掘状況（II区検出後、北から）



5. I 区 SC007 挖削状況（北東から）



1. I 区 SC005 および SX002-011-035 (南東から)



2. I 区 SC005 および SX002-011-035 (南西から)



3. SX011 最下層砂礫層縦断面土層・SX002 (北東から)



5. SC029 および上部ピット掘削状況 (北西から)



4. I 区 SC007 および上部遺構検出状況 (南西から)



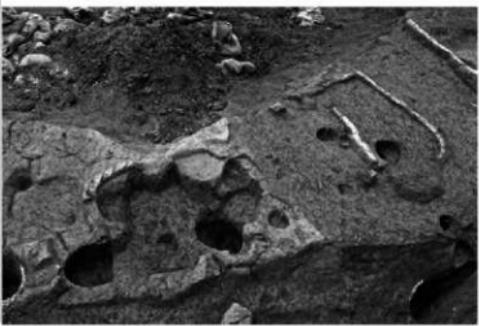
1. I 区北西～北側調査状況（南から）



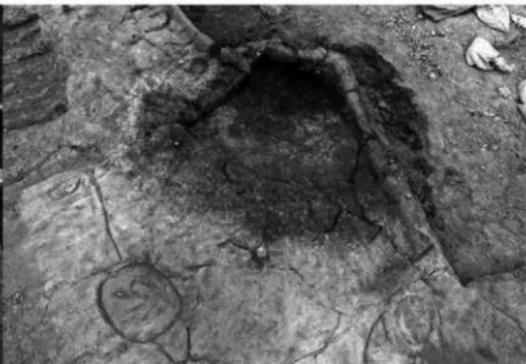
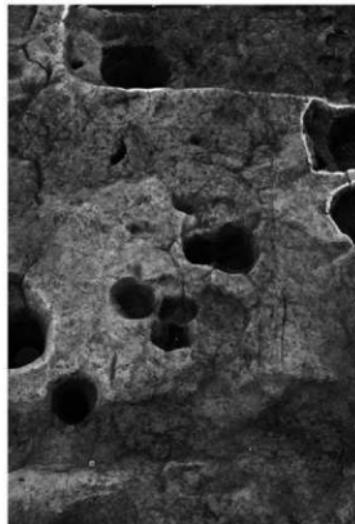
2. I 区北西部 SX064～SX069 完掘状況（北東から）



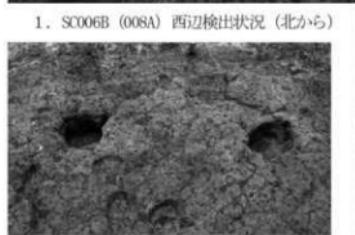
3. I 区北西部 SX069-067 ほか遺構群調査状況（北東から）



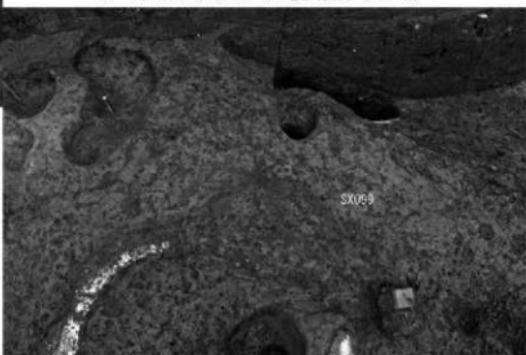
4. I 区北西部 SX070-069, SC067, SX101, SC102 完掘状況（北から）



2. I 区 SC023, SX026・027 検出状況 (西から)



1. SC006B (008A) 西辺検出状況 (北から)



3. I 区 SC102, SX099 炉址検出状況 (南東から)



5. SX025, SP1065 検出状況 (北西から)



7. SE025, SX021 完掘状況 (南西から)



6. SX025 井戸側痕跡, SP1065 挖削状況 (北西から)



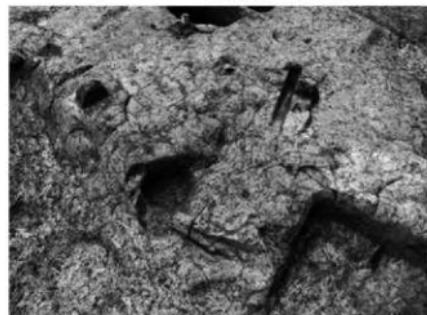
1. I 区 SK010-009 検出状況（北東から）



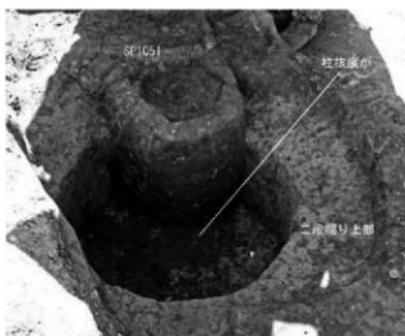
3. I 区 SX026・027 挖削状況（東から）



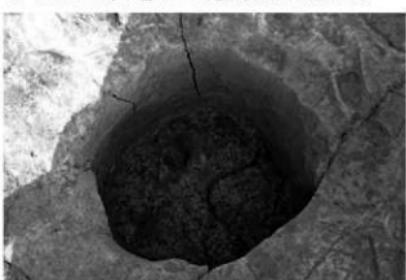
2. I 区 SK024 底面器出土状況近景（北西から）



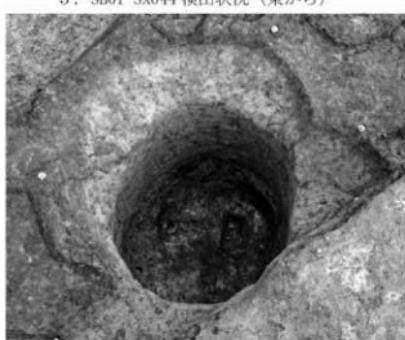
4. SX026-027, 下層 SP091 完掘状況（北東から）



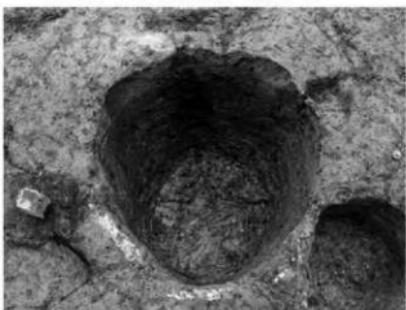
5. SB01-SX044 検出状況（東から）



7. SB01-SX077 完掘状況（南西から）



6. SB01-SX044 検出状況（南から）



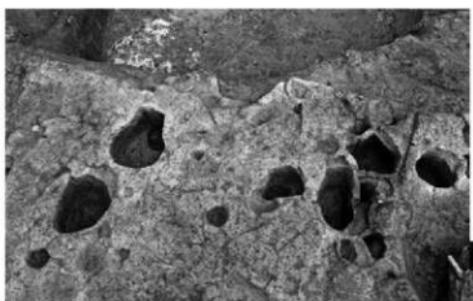
8. SB01-SX048 完掘状況（北から）



1. SB02-SX050 完掘状況（北西から）



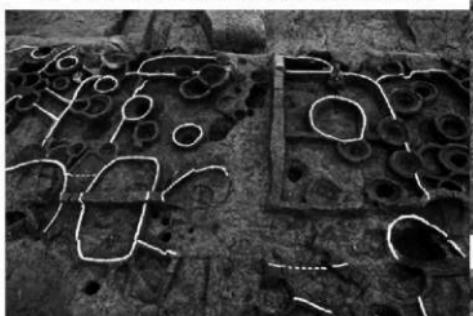
2. SB02-SX057 半裁土層状況（北から）



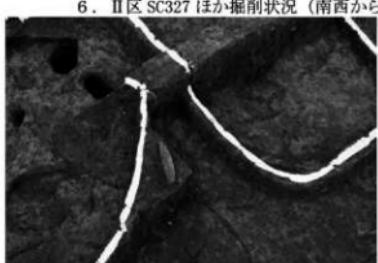
4. I区 SC007 北側周辺柱穴群掘削状況（南東から）



3. SB02-SX057 底面柱痕検出状況（南から）



5. I区 SC007 北東・SC032 下部柱穴群完掘状況（東から）



6. II区 SC327 ほか掘削状況（南西から）

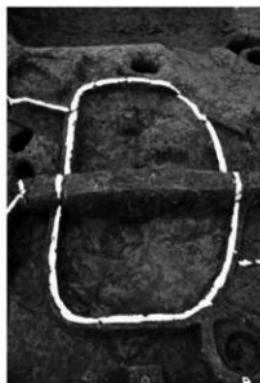


8. II区 SC339 ほか掘削状況（南西から）

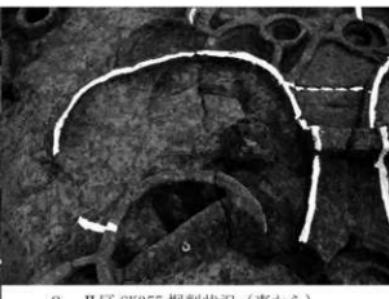
7. SC327 石包丁出土状況（東から）



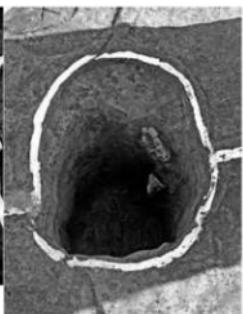
1. II区主要部遺構掘削状況（南東から）



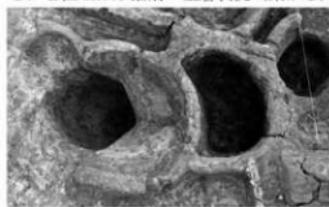
2. II区 SK351 掘削・土層状況（東から）



3. II区 SK355 掘削状況（東から）



4. II区 SP2007 掘削状況（東から）



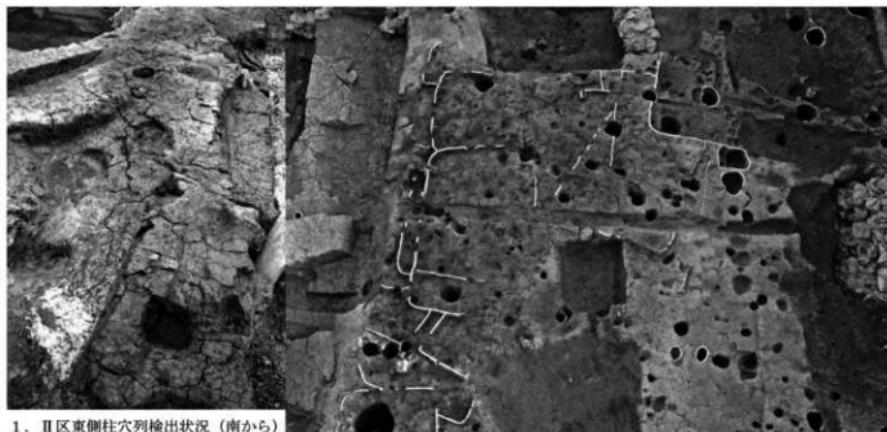
5. II区 SP2226（西 SP2108）（北から）



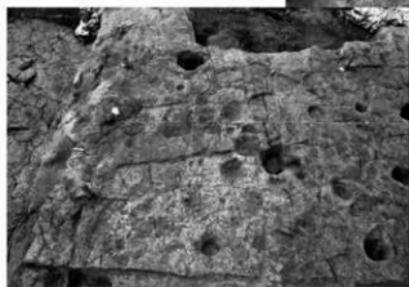
6. II区 SX309（SP2009）半裁土層状況（西から）



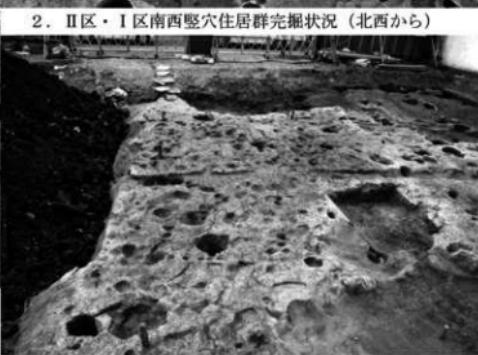
7. II区 SX309（SP2009）柱痕中層土器出土状況（西から）



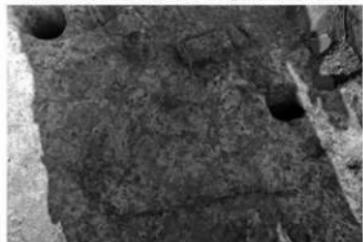
1. II区東側柱穴列検出状況（南から）



3. II B区・II A区東2面検出（北西から）



2. II区・I区南西竪穴住居群完掘状況（北西から）



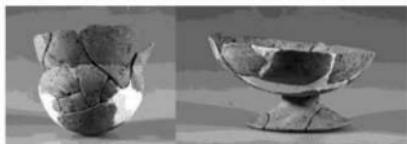
4. II区SK352完掘状況（南から）



6. II区南東半下部遺構（第2面）完掘状況（西から）



7. II区下部遺構（第2面）完掘状況（北東から）



8・9. SK024出土精製小型丸底壺・精製小型脚付鉢

報告書抄録

ふりがな	ひえ79ひえいせきぐんだい139じらうきのうこうくー
書名	比恵79
副書名	—比恵蹟跡群第139次調査の報告—
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1347
編著者名	久住猛輝
編集機関	福岡市考古委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667
発行年月日	昭和20年3月26日

遺跡名ふりがな	ひえいさくべぐんたいじうじょうきさ
遺跡名	北東遺跡群第139次調査
所在地ふりがな	ふくおかはなはかたくはかたえみみなみ4じうとうめ4-2-1, 4-6-1
遺跡所在地	福岡市博多区博多駅南4丁目42-1, 46-1
市町村コード	40132
遺跡番号	0127
北緯	33度34分45.9秒 (世界測地系)
東経	130度25分36.4秒 (世界測地系)
調査期間	20150718~20151030
調査面積 (m <sup>2</sup> )	489, 12m <sup>2</sup>
調査原因	ビル (事務所および共同住宅) 建設

比惠 79

—比恵遺跡群第139次調査の報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1347集

2018年3月26日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神一丁目8-

印刷 (有)アドプリ  
福岡市博多区山王二丁目 5-27

